

第21回

川に学ぶ体験活動全国大会in東京

歴史的・文化的な水都・東京の川の価値再発見／「大江戸・かわ物語」

テーマ「大江戸・かわ物語」

報告書

開催日

令和4年 **10月29**日(土)～**30**日(日)



河川
基金

この活動は公益財団法人河川財団の河川基金の助成を受けています。

この活動は一般社団法人関東地域づくり協会の助成を受けています。

目 次

プログラム 1 日目

フラッグ受け渡し	1
開会の挨拶	1
実行委員長 田村 祐司	
祝 辞	2
国土交通省河川環境課長 豊口 佳之氏	
基調講演	4
「江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティ」 竹村 公太郎氏	
全国活動事例発表	13
相馬 孝氏（小川原湖自然楽校）	13
前川 勝人氏（琵琶湖・淀川流域圏連携交流会）	15
山田 大志氏（NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワーク）	17
大井 里美氏（NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会）	20
パネルディスカッション	22
「水都・東京の川の価値再発見」	
コーディネーター：岩本 唯史氏	
パネラー：土屋 信行氏	
田村 祐司氏	
鈴木 昇氏	
陣内 秀信氏	
コメンテーター：竹村 公太郎氏	
エクスカージョン説明・次回全国大会へのフラッグ受け渡し／抽選会など	43
閉会の挨拶	46
宮尾 博一（NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 代表理事）	

プログラム 2 日目

エクスカージョン①	
神田川・日本橋川・江戸城コース	48
エクスカージョン②	
旧中川・北十間川コース	50
エクスカージョン③	
荒川ロックゲート体験コース	52
エクスカージョン④	
都心でラフティング	54
協賛団体	55
実行委員／ RAC について	56

■フラッグ受け渡し



昨年青森で全国大会をやった時の実行委員長をした相馬と言います。昨年までに1回流れたんですね、コロナの影響で。それで去年はWEBで開催したんです。WEBで開催できたのはいいんですけども、フラッグの受け渡しを今回に向けてのやつが当然ながらできなかったんですね。私たちもそれだけが心残りで、ここへ来てそれは一番先にやらねばならないなど、無理やり入れ込んでもらいました。ということで田村実行委員長の方にお渡ししたいと思います。

■開会の挨拶

実行委員長 田村 祐司



皆さんこんにちは。改めてご挨拶させていただきます。第21回の川に学ぶ体験活動全国大会東京大会の実行委員長をさせていただいております東京海洋大学の田村と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。

今、昨年度の青森大会実行委員長の相馬様から大会旗をいただきましたが、コロナの関係で令和2年度は開催が延期され、昨年度は青森県の小川原湖で大会が開催されました。実施形態はオンラインと、残念ながら対面開催が叶いませんでした。非常に活発な情報交換ができたものと思います。そして、ようやくコロナも落ち着いてきた中で、今年度の東京大会が対面できたことを、実行委員全員で非常に喜んでます。

ところで、皆さんの資料には、川に学ぶ体験活動協議会（RAC）がどういう経緯で設立されたかなど

が記載されてますが、今から25年前の1997年に改訂された河川法により、川での体験活動を通じて、川に関するさまざまな知見を得て、水辺環境や水辺防災を考える機会を創る動きが国土交通省さんを中心に行われ始めました。

その後、国土交通省さんの主導で、川の体験活動団体が連携して情報交換を行う研究集会の場が3年間実施され、翌2000年に、全国の川で様々な体験活動を行っている団体が連携して、「川に学ぶ体験活動協議会（RAC）」が設立されました。そして翌年の2001年に、第1回のRAC主導による全国大会がスタートして、かれこれ20年経って今回第21回ということになりました。

さて、ここで私自身がどのような経緯でRACに繋がったかを少しご紹介させていただきます。それまで、私自身RACという存在を知りませんでした。東京海洋大学が海だけでなく内水面の川や湖に関しても範囲を広げていることから「川の活動」を調べていた所、RACという団体を知り、そして全国大会が海洋大の品川校舎で開催されるとのことで参加させていただいたことが、RACとの出会いでした。そして、大会後の懇親会において、数年前にお亡くなりになられた地域交流センターの田中栄治さんと出会い、そこからRAC

■開会の挨拶 実行委員長 田村 祐司

の活動に関わらせていただくようになりました。

今回16年ぶりに、日大の駿河台キャンパスをお借りして東京開催が実現したことを、大変嬉しく思います。

このあと、「江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー」というテーマで、竹村公太郎先生に基調講演をいただきます。その後、全国の活動事例発表を4名の方にお願ひし、最後に「水都・東京の川の価値再発見」というテーマで4名の方にパネルディスカッションをしていただきます。

本日の講演会では、ご参加いただいた皆様から様々なご質問をしていただき、活発なディスカッションを通して、3年ぶりに開かれた対面での講演会の機会を

実りあるものにしていただければ幸いです。そして、これを契機に、ご参加いただいた皆様が、東京をはじめ全国の川を見直して、今後の川での様々な活動に繋がっていただければ有難いです。

また、明日の4つのエクスカーションは、どれも素晴らしい企画でありますので、ご参加の皆さんは全てに参加したいのではないかと思います。

今日の講演会、そして明日の午前中の4つのエクスカーションを思う存分に楽しんでいただき、川に関わる様々な知見を得てお帰りいただければ幸いです。

それでは、2日間どうぞよろしくお願いいたします。

■祝 辞

国土交通省河川環境課長 豊口 佳之氏



本日はお招きいただきましてありがとうございます。ただ今ご紹介いただきました国土交通省河川環境課長をしております豊口でございます。まずは本日第21回川に学ぶ体験活動全国大会が無事に開催できましたこと、まことに喜び申し上げます。特になかなか対面できない日々が続いたということでございますので、対面での開催、このように多くの方々の参会の下での開催、おめでとうございます。

また日頃から河川行政につきまして皆様に多大なるご理解ご協力をいただいておりますことに深く感

謝申し上げます。どうもありがとうございます。

皆さんご承知のとおり、最近では気候変動の影響もありまして災害が激甚化・頻発化しております。今年も7月には宮城県などで、8月には日本海側の広いエリアにて、9月に入りましてからは台風14号、15号と相次いで台風が発生して全国各地で酷い被害がありました。ただですね、事前放流を含めましたダムの洪水調整、あるいは近年実施して参りました防災・減災、国土強靱化等の取り組み等により、ぎりぎり被害を免れたところもあります。そういった成果はあるものの、被害がなんとか治まったところもぎりぎりの状況でございましたし、いまだ甚大な被害を受ける地域もあるということで、引き続き治水対策について取り組んで参りたいと思います。けれども、川が我々に脅威を見せるのは年間で言うと数日ということで、残り350日程度、もうちょっとあるかもしれませんが、非常に穏やかな川で、我々の生活に恵みを与えてくれています。かつては交通の要であり、また生活の場であり、生業の場であり、現在も憩いの場であり健康増進の場であり、生物た

■祝 辞 国土交通省河川環境課長 豊口 佳之氏

ちの生息・生育していく場でもあるという、多様な機能を持ち歴史・文化を担ってきたのが河川であります。こういった治水対策を必要とするような脅威の部分もありますけれども、我々にめぐみを与えてくれる川、これは両面、表裏一体のものでございますので、両方の面を学ぶうえでも実際の川の現場で体験するということが非常に重要なことでございますし、そういったことを主導する指導者の育成にあたっておられます RAC などの皆さんの活動には頭が下がる思いでございます。

冒頭にも申し上げましたが、コロナ禍でなかなか体験活動も難しいところがあったのかなと思いますが、コロナを押さえ込むというよりですね、コロナとともに生きていこう、with コロナと言われています。密閉空間ではない河川での活動というのは with コロナ時代にふさわしい活動だと思っておりますので、これからがより盛んになるんじゃないかと思っております。我々もさまざまな啓発活動、あるいは環境教育、防災教育、またミズベリングのような取り組みをさせていただいておりますが、皆さんの活動と連携して取り組んで参りたいと思っておりますし、皆さんの主体的かつ継続的な活動を応援しているものでございます。いろいろとお話しさせていただきました

が、本日の開催に当たりましてご尽力されました田村実行委員長をはじめとする実行委員の皆様方、また宮尾代表理事をはじめといたします RAC の皆様に変な敬意を表しますと共に、本日ご参会の皆様のご健勝とご活躍、さらなる積極的な活動を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉と代えさせていただきます。本日は竹村先輩のご講演、あるいは全国の事例発表、また東京再発見のパネルディスカッションと多様なプログラムも期待しておりますし、明日も 4 つのコースに分かれた体験活動ということで、この 2 日間のプログラムの無事の、無事故の開催につきましても祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

司会：

本日は実行委員としてお二人の方をご紹介しますいただきます。

お一人目の方が国土交通省水管理 国土保全局河川環境課 河川環境保全企画調整官、信田智様にお越しいただいております。

そしてもうひと方、国土交通省関東地方整備局河川部長、塩井直彦様でございます。

ここで参議院議員、足立敏之先生からメッセージをいただいておりますのでご披露いたします。では代読させていただきます。

●国土交通省元技監／参議院議員 足立 敏之氏からのメッセージ

川に学ぶ体験活動全国大会 in 東京の開催誠にありがとうございます。

歴史的・文化的な水都・東京の川の価値再発見をコンセプトに「大江戸・かわ物語」をテーマとして 3 年ぶりに一堂に会しての開催となりますこと心からお慶び申し上げます。

河川審議会の「『川に学ぶ社会』を目指して」の答申を契機に始められた川に学ぶ社会を全国各地域に広めることを目的とした活動も特定非営利活動法人川に学ぶ体験活動協議会と会場となる開催地の会員団体ほかの皆様により開催されてきたこの大会も 21 回を数え

全国で親しまれる活動となっていることについて関係する皆様のこれまでのご尽力に深く敬意を表します。

私としてもこれまでの経験をいかし活水や水辺の空間の整備のため今後とも必要な公共事業予算の確保に引き続き全力で頑張っ参りますので暖かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

結びに大会の開催により川に学ぶ社会への参加の輪がますます広がるようご祈念申し上げますとともにご参加の皆様方のますますのご健勝ご活躍を心からお祈り申し上げお祝いのメッセージといたします。

■ 基調講演

江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏



ご紹介いただきました竹村です。日本水フォーラムの代表理事では、世界の水問題のボランティア活動をしています。今日は「水都東京未来会議」の代表として参加しました。法人格はありませんので自由に集まって言いたいことを言う会議です。行政が言えないことを言ってやろう、誰も言いにくいことがありますので、私達が自由に議論しようということです。

いろんな提案も出きますので、楽しみにしていただきたいと思います。今日はRAC事務局の方から江戸東京の話をしてくれとお願いがありました。今更、東京は分かっているという感じがします。実は江戸、東京はですね、東京人の東京じゃなくて日本人全体の東京だということを意外と皆さん知りません。今日はそのことをお話しします。東京人のための東京でなくて、日本全国の人々のための東京なんだということです。

家康、江戸の幽閉

江戸東京の誕生の謎、日本人のアイデンティティーという後半がメインです。楽しんで聴いてください。

まず江戸ができたのは、家康が1600年に関ヶ原で勝ってからです。当時はどの武将も全て天下を制するのは京都だと思い込んでいたんです。しかし、徳川家康は今まで武将がやったことがないこと

をやってしまいます。箱根を越えて途方もない田舎の江戸に行ってしまうんです。途方もない田舎です、当時は。こんな最悪の場所ではなかった。後ほど皆さんに家康が見た江戸の写真をお見せしますので楽しみにしてください。

江戸誕生の原点、関ヶ原1600年に勝った10年前、家康は豊臣秀吉に江戸に幽閉されてしまいます。移封というより、完全に幽閉だと思っています。豊臣秀吉にやられてしまった。関ヶ原の10年前です。秀吉が天下を獲った時は1590年ですからね、北条を征伐した時が秀吉の天下です。

悲惨な関東

これが現在の関東です。縄文前期6000年前、縄文の人たちが生きていた時の地形を表すには海面を5m上げるだけです。たった5mですよ。5m上げると関東は海だったんです。この渡良瀬遊水地がちょっと見えるでしょ。ここまで真っ平らでした。コンピューターで海面を5m上げただけで縄文時代の地形が見えます。非常に素晴らしいと思います。

徳川家康が江戸に入ったとき、縄文時代に海だったところが全面的な干潟、湿地帯になっていました。皆さんこの地形を見てください。これが群馬県、ここを流れているのは利根川ですね。利根川はずーっと流れ下っても絶対銚子に行かないんです。ブロックされているんです。関宿というところで地形にブロックされた後、利根川は東京湾へ向かって流れるのです。

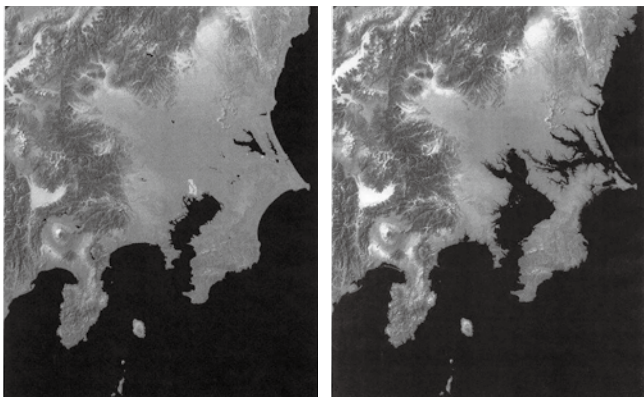
縄文時代から利根川と渡良瀬川と荒川がここへ流れ込んできて、大湿地帯を作っていたのです。川というのは土を持ってくるので、その川の土が大湿地帯を造っていくのです。これが家康の江戸に入った時の姿です。ここに江戸城があって利根川、渡良瀬川、荒川が流れ込んできて、昔は海だったところを大湿地帯にしていって。

当時の姿はこうです。これは江戸城じゃない、フランスのランス川の修道院、モン・サン＝ミシェル

■ 基調講演 江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏

ですけど、あの有名な。小さいランス川の河口地帯もこんな広大な干潟だったので、あの利根川、渡良瀬川、荒川が作った干潟って目も眩むような干潟だったんです。

武蔵野台地、あの新宿がある方です。江戸城がその先端にいた。とこういう状態でここは稲作ができなかった。海水が奥まで行ってしまうのです、高潮の時は。この武蔵野台地は不毛の大地でした。なぜかという、アツと2、3時間くらいで海に出てしまう川しかない。大きな川はこの武蔵野台地にはないんです。だから武蔵野台地で中央線と小田急が発達したのです。川がなかったから大規模農業をやっていない。土地改良組合や共同体がなく森林地帯だった。不毛の土地だったのです。だから今、武蔵野台地があんなに発達したのです。



現在の関東

縄文前期の関東(海面5m上昇)

関東の大森林地帯

なんで家康がこんな不毛の土地に帰ったのか。稲作はできない、水もない、なんでこんなところに帰ったのか。これは歴史家の中では大問題になっています。いろんな論争があるんです。私は人間模様が全く分かりませんから、地形だけでこういうことじゃないかなとインフラから見えています。アメリカの歴史学者、コンラッド・タットマンが作った図面です。赤い部分は奈良時代にどこから木を持ってきたのかを表しています。奈良時代に奈良から琵琶湖の北まで紀伊半島まで採りに行っているんです。ということは奈良時代に奈良盆地の周辺には木はなかったということです。紫のところは何かというと、戦国

時代。戦国時代にこの能登半島、山口、紀伊半島、高知、伊豆半島まで木を採りに行っているのです。

なぜこんなことが分かったかというと、コンラッド・タットマンというアメリカの歴史学者は、日本の寺社仏閣に入り込んで縁起物を全部チェックしたのです。縁起物は必ずどこから木を持ってきたのかを書いてありますので、何年に創建して何年に大改修してとか、各寺または神社の歴史が残っています。世界でそのような文献が残っているのは日本だけです。こんな立派な文献が残っているのは。世界広しといえども日本だけです。それを彼は図にした。

戦国時代、あれだけ広いエリアから採りにきたということは、寺社仏閣の木は関西にはもうなかったということです。関西は禿山になっていたのです。日本はすぐ禿山になってしまうのです。これは滋賀県、戦国時代じゃなく昭和ですよ。これが京都の山科、あの綺麗な山科が禿山でしょ。これが比叡山、禿山ですよ。信長が比叡山を討ち入りして焼き果たしたなんていうのは罪が軽い方で、一般の人間の僕たちが生きているということは山全体を禿山にしちゃうのです。

戦国時代みんなが暴れまわっていたときにはこうだった。これは黒澤明さんの「羅生門」という映画のセットです。CGじゃない、素晴らしいセットを作ったのです。つまりこの戦国時代は今見た羅生門のような、平安京、京都にある全てのものが朽ち果てるような、人間が木材を採り尽くしているということをこの図は表しています。徳川家康は何を狙って江戸に行ったかっていうと、この黄色を見てください、手付かずでしょ。これ江戸時代に手をつけたところです。ということは、徳川家康はこの荒廃した関西から、関東の手付かずの緑溢れる武蔵野台地に行ったのです。

先ほど、武蔵野台地は不毛の大地だとバカにしたけど、実は大森林地帯だった。僅かしか残っていないんですけど、狛江市の駅前にちょっとあります。富士山の原生林の写真を撮ってきましたけど、こういう原生林が何千年間か、武蔵野台地の誰もいないと

■ 基調講演 江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏

ころにあったんです。つまり利根川、多摩川、荒川水系の日本最大の、今でいう油田地帯を見つけたんです。だからあんな関西なんか生きていけない、って箱根を越えて田舎の江戸に行っちゃったんです。家康は、エネルギーを狙ったから江戸に行った、という私の解釈です。

関東の開発と治水

徳川家康は3万人の部下軍勢を連れて、あの悲惨な江戸でどうやって食べさせるのか？これが問題でした。徳川家康は多摩川まで行くのです。これは玉川上水の地形で、これは多摩川ですね。見てください、綺麗に沖積平野でしょ。多摩川に行って二ヶ領用水という日本最大、最初の大型農業開発を行います。江戸では全く食べられない。多摩川で立派な農業用水路を作ったのです。ですから川崎が拠点だったのです、江戸時代の。これが今でもある二ヶ領用水です。

次に関東全体をどうやって開発するかです。6000年前の地形を見てください。徳川家康はここを切ったんです。この狭い関宿という所を。利根川は群馬からずーっ流れてきて、この高台、微高地を掘って、利根川の洪水を銚子に持って行ったのです。

現在、洪水の70パーセントを銚子へ持っていつているのです。ブロックしているのです。本来、こんなことやったら河川法違反です。完全に流水障害ですから。400年前、徳川幕府はここに杭を打ってたんです、洪水が江戸に来ないように。つまり、江戸を守るために利根川の水を銚子に持っていく。結局、利根川下流部を犠牲にして江戸を守る。400年経ってもまだ落とし前がついていないんです。これが小貝川の決壊で、昭和58年です。小貝川の上から来る洪水ではないのです。下から来る洪水です。小貝川の水防団の人たちはペットボトルをポンと入れて、下流に流れる間は安心して。これが止まった瞬間逃げろって言って避難するんです。小貝川の水防団長に聞いたのです。下流に流れている間は見て、止まった瞬間、みんな逃げるんです。利根川の逆流です。逆流したこの利根川の水は何日も続きます。小貝川の洪水は大体1日2日で終わってしま

ますが、利根川だと3日4日続きます。

堤防っていうのは水を貯める装置ではないんです。水を流す装置なんです。水を流す装置なのに水が貯まったら大変なことになるんです。ダムじゃないから、どこが切れるか分からないんです。だから小貝川と鬼怒川は利根川が来てしまっているから危ないのです。利根川の下流部の千葉茨城を犠牲にして今、東京は安全に生活しているんです。小貝川流域の人たちはみんな知っています。水防団の人たちもよく知っています。東京のためにはしょうがない。だから関東整備局はですね、利根下流河川事務所・下館河川事務所・霞ヶ浦事務所・利根上流河川事務所と、直轄事務所を集中させているんです。400年前のこの利根川東遷の落とし前を今でもつけようと努力しているんです。これが江戸の誕生の秘密の一つです。

湿地の江戸

これが150年前の広重が描いた浮世絵です。たった150年前です。私の爺さん婆さんが生きていた時代です。日暮里あたりの綺麗な夕焼けだったのです。農夫が家に帰っていく、穏やかな有名な絵です。江戸に丹頂鶴がいたのですよ。自然の丹頂鶴は、今、北海道の釧路湿原にしかいないんです。これがたった150年前、江戸にいたんです。だからドジョウやウナギやカエルが目一杯いたんですね、湿地帯だから。

利根川を東遷しても、江戸には荒川と多摩川の水が流れ込んできます。今の荒川の隅田川も。だから常に江戸は雨が降ったら湿地帯になってしまうのです。東京だけじゃなくて日本全国の沖積平野は同じ状況です。ほとんどの人はこの事実を知らないんです。自分たちの下が湿地帯で、ヤマタノオロチが潜んでいる、ということを知りません。人々を脅かしてもしょうがありません。関係者がきちんと知っていればいいんです。

こういう状況の中で日本人は最先端近代都市を作ってしまったのです。この湿地帯を乗り越えてきたのが稲作文明なんです。国土交通省の治水だけでなく、農水省の土地開発事業、下水道の排水事業、様々な事業が今実行されて、湿地帯が乾田化されて

■ 基調講演 江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏

いったのが日本の状況です。

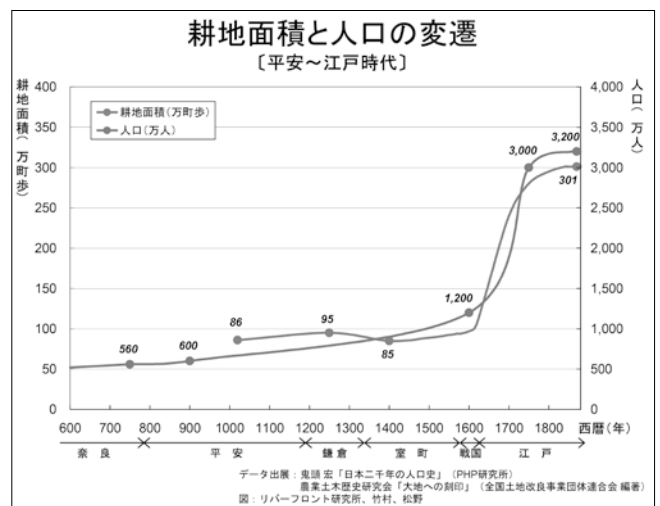
家康の流域統治

徳川家康はこのように江戸を作りました。平和な 250 年から 260 年の間に徳川幕府が何をしたかという、最初に方針を決めたのが家康だったのです。家康は全国の流域に諸大名を封じたんです。皆さんあまり見たことないかもしれませんが、川の流域で作った日本地図です。ここに利根川があります。これは北上川です。それぞれ二百数十あった戦国大名をこの流域の中に閉じ込めたのです。お前たちはもうこの尾根から出ちゃいけないんだぞと。戦国時代は膨張するエネルギーの大名たち、彼らはいい土地があったら尾根を越えて取りに行ったのです。それはだめ、尾根を越えないで流域の中なら何やってもいい、という制度にしたんです。

これは四国の那賀川河川事務所が作った図です。これが素晴らしいんですよ。一級河川那賀川のこれは堤防です。自分たちが管理している川ですが、那賀川事務所の人たちは一皮剥いてしまったのです。私が河川局長をやっている時に、四国の職員たちが持ってきて「局長できました！」「なに？」「これを持ってきたんです。ヤマタノオロチが住んでいるんです。」自分たちが住んでいる下にはヤマタノオロチが住んでいるのです。彼らは僕に突きつけたのです。目つきが変わってね。何故かという、私この上流でダムを中止にしたのです、私が。彼らは僕に怒ってはいないですよ。悔しかったんでしょうね、四国の職員は。だから僕にこんなヤマタノオロチがいるんですよって説明しにきたんです。僕も初めて見ました、こんなの。つまり、ヤマタノオロチを一本の堤防に押し込めたってこと自体が無理なんです。土台無理なことをしたんです、日本人は。誰がやったかっていうと江戸時代の人たちです。膨張するエネルギーを尾根から越えて戦えないように、自分の流域の中に 260 年間エネルギーを注ぎ込んだんです。このヤマタノオロチを一本に押し込めたのは江戸時代の人です。近代じゃないんです。これが全ての日本の流域の誕生の姿です。

これはアラスカの国立公園内の川です。山から出てきた川はヤマタノオロチになって扇状地または沖積平野になって広がっていく、これが本来の川の自然の姿なんです。今こんな川見たことありますか？日本で。僕は見たことないです。日本のどんな寂しいところでも、こういう川はないです。全国隅々まで、どんな小さな川でも日本人は一本の川に押し込める。それを海までドン付けしている。なぜかという、生産性を上げたいからです。豊かになりたかったのです。

江戸時代に造られた河川



江戸時代に 1 回目の人口爆発があり、1 千万人から 3 千万人に増えた。これは農業土木の僕たちの仲間が作った、素晴らしい図面ですが、平安・鎌倉・室町・戦国と農地は全然変わりません。江戸時代になって一気に日本国土の耕地面積が上がっています。耕地面積と人口がリンクしています。つまり今の国土は、江戸時代に生産性を上げるために流域単位で作られたものなのです。99.9 パーセントの堤防は江戸時代に作られたのです。0.1 パーセントが明治以降に作った放水路という名前です。

明治 29 年に河川法ができました。河川管理者という概念ができました。河川管理者に予算付けをした時、「お前たちは江戸に作られた堤防を管理しろ」そう言われ予算の名前は「河川改修費」です。大蔵省はすごいね、河川の実態に合う予算名にした。今ある堤防を改修しろ、広げたり、高くしたり、強くし

■ 基調講演 江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏

たり浚渫したり。河川管理者って皆さんは言うけど、結局は江戸時代の財産を引き継いでいく。そのことを知ってもらいたいのです。

このような事例が全国の川で行われました。今日全国から来られている人たちも自分たちの川を見て、全部江戸時代の人たちが作った川だと思って下さい。

川と遊び

江戸に入って徳川家康が自らやった工事、自らのお金でやった工事は一個しかありません。この小名木川の運河です。それ以外、虎ノ門に立派なダムがあったんです。6mくらいなのかな、基礎入れたら。これも実は当時の浅野藩が作った。溜池っていう地名だけ残って、あとは戦後や震災の瓦礫で埋められました。もちろん日本橋も全国の大名が力を合わせた。江戸城、半蔵門も全国の大名がお手伝い普請でやった。

日本堤、浅草寺の裏にあって隅田川の洪水を守るために作った堤防です。日本全国の大名が一生懸命作ったから日本堤という名前になったというのが定説です。堤防を作っただけじゃなくて、江戸幕府の役人は遊郭を持っていったのです。日本橋にあった遊郭を寂しい日本堤へ移転させた。そして、江戸中の男を歩かせることで見事に締固め効果を発揮させた。

これが普遍的な作戦です。堤防を作ったらそこに神社を持っていってお祭りをする。それが治水の原則なのです。今でもそれは原則です。人々が集まって川で遊んでもらいたいのです。川が怖くて逃げられちゃ困るんです。面白おかしくして遊んでもらいたいの。このRACの活動もその一環です。

川で遊ぼうというのは共同体がそこで思い出を作って文化を作ることなんです。遊ぶということが文化なのです。その地域の共同体の一つのイベントです。だから遊ぶことは意味があるんです。川が人々を取り持ってくれるのです。

全国の人々が造った江戸

両国の橋も全部大名たちが作りました。小名木川の運河だけは除いて、江戸のすべては全国の大名が作ったんです。諸大名の建築家、土木技術者連れてくる。お金と働く若衆を連れて来て作らせたのです。

つまり江戸のすべてのインフラは全国の人々が作ったんです。

江戸っ子は作ってないんです。江戸っ子は遊んだり威勢の良い火消しやったりする、また商売をやったりする。本当の江戸のインフラを作ったのは全国の人たちです。もちろん資金もそうです。

そして江戸で働いた地方の人々は、自分の国へ帰って「俺は江戸のダムを作ってきたぞ!」とか、伊達藩の人は仙台に帰ったら「俺たちは大手門を作ってきた!」「江戸はこうだった」とか。つまり江戸に260年間、全国の人たちが江戸に集まって江戸を作った。

これはとても大きな意味があるのです。江戸という物語を中心として、日本が全国に広がっていくのです。常に江戸が中心なのです。物語を共有するのは、共同体です。3500kmという細長い日本列島の人たちが、日本人という共同体を結成した。

近代化の開始

江戸時代の後半、大航海時代の帝国の時代になります。アヘン戦争があり、ペリーが来て、大政奉還があり、王政復古。そして勝海舟と西郷隆盛の会談で、江戸は戦火から免れて、明治になります。

明治になって一番苦しい課題が廃藩置県でした。全国の大名が各地方で持っていた権力を明治政府に持て行かなければならない。一番の明治政府の大問題だった。

結論を云うと、鉄道が廃藩置県に大きく役立ちます。明治5年に新橋横浜間に開通した蒸気機関車。日本人は近代の象徴の蒸気機関という大きなエンジンを知った。黒船の大きな蒸気機関を見て、日本の近代化のシンボルの蒸気機関車を作った。多摩川は渡して行くと15~20分かかった。ところが1分もかからない、何十秒かで多摩川渡ってしまう。日本人が初めて川を越える、地形を越えた瞬間です。

全国の流域があってその中に大名が閉じ込められた、というのは大名だけではないのです。すべての日本人が流域の中に閉じ込められていたのです。地形に閉じ込められていたのです。領主様のために働

■ 基調講演 江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏

いて、領主様に年貢を納めて、人生を終わっていく。それが260年間、ベーシックな日本人の生き方だったのです。

川を渡るのも大変だ、自分のいる場所は流域の中。ところが蒸気機関車が地形を乗り越えさせた。日本人にとって初めての経験です。一瞬にして川を乗り越える近代。その近代を見事に表したのが、広重の浮世絵です。日本帝国議会が出来て、近代化になります。各地方に各大名が張り付いている権力分散社会から東京一極が開始されます。一気に東京に資金と若者が集まってしまった。

この明治維新を「人類の奇跡だ」と言った人がいるんです。トインビーという非常に有名な歴史家が「人類の歴史の一つは日本の明治以降の近代化である」と言ったのです。日本の奇跡ではありません。人類の奇跡が日本の近代化だと。奇跡とは、ありえないことです。奇跡って言った彼には分からなかったのです。何故あんな分散して、島があって、山脈があって、沖積平野にポツンポツンと生きていた日本人たちが、東京に集まってしまったのか。

封建制度をやめて国民国家になった。封建制度は領主様のために働く人生です。国民国家というのは自分自身のために働く人生です。国民国家に一気になった。人類の奇跡です。世界の歴史を見てもこのようなことなかった。それが大歴史家の言葉の言葉です。何故かは今日の後半の話にしたいと思います。

通訳がない日本

ペリーが来て、大政奉還があって、王政復古があって、勝海舟。繰り返しましたが、何故繰り返したかということ、どうしてもおかしいのは通訳がないのです。日本人は通訳がないで喋っている。これは不思議です。トインビーはこういうことを理解できなかったしなかった。なんで3000kmも離れた奴らが集まって、方言はありますが日本語でコミュニケーションしている。通訳はいない。これはあり得ないことです。

言語は分裂する宿命なのです。イギリスのエリザベス女王が亡くなりましたが、イギリス連邦のイギ

リス英語、コーンウェール、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、この5言語がイギリス、あの狭い世界での公用語です。英語ではないのです。この間、ウェールズ語をちょっと見たのですが、全然わからない。まるっきり英語じゃないんです。ローマ字では書いてありますよ。ローマ字ではあるけど、英語じゃないんです。なんであんな狭い、日本よりも狭い島国で、こんな言語が分裂しなければならないのか。実は、これが人類の原則なんです。

海峡と山と河川で分断されて生きてきた日本人、これが同じ言語を喋る。3500kmの長さの真ん中に脊梁山脈が流れている。左右に無数の川が流れている。日本は海峡と山々と河川で分断された国家なんです。

この日本橋の絵を見てください。大名行列が朝、日本橋から地方へ行くのです。これから何百キロも歩いていく大変な行進です。参勤交代の行列ってすごく多かったんですよ。百人二百人じゃないんですよ。五百人超えた行列もあるそうです。参勤交代は、領主様が2年に一回江戸に行くということです。武家諸法度という家光の作った法律があった。実際には参勤交代は2年に一回大名が江戸に行くんじゃないんです。2年に一回、江戸育ちの大名が地元に戻るのです。何故かという奥様も自分を産んだお母さんも、自分の女房もみんな江戸にいます。江戸で生活している。だから自分が産まれたところは江戸、江戸っ子だったのです。2代目、3代目くらいの大名になるとみんな江戸生まれです。江戸で生まれて江戸で育って、家督を引き継いで2年に一回自分の領土に戻る。そこで2年間住んで今度は江戸にまた戻ってくる。それが参勤交代でした。

だから日本人の単身赴任ですよ。日本人の単身赴任というのは根が深いんです。決して思いつきじゃなくて、制度として、遺伝子の中に入っちゃっているのです。江戸育ちの大名が2年に一度地方に行ったら何を喋るか。地方の言葉じゃないんです。江戸弁を喋るのです。お殿様が江戸弁喋っている限り、部下たちは江戸弁を喋らざるを得ない。江戸弁を喋

■基調講演 江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏

るんです。部下も田舎者と言われたくないから江戸弁を喋る。日本語を喋るシステムとして、この大名行列は機能したと。

今の国会議員の人たちも基本的に大名と同じです。中学・高校の青春が東京なのです。それが地方に帰ってそこで選挙を通して帰ってくる。東京弁が標準語かどうか別にして、東京で喋る言葉が全国の共通の話し言葉になったのです。

文字の共有

もう一つ、日本人は文字も共有していたのです。これは広重の朝の品川宿で、船がすごく多いのです。これは神奈川宿。夕方になり船がどんどん入ってきて、一晩休んで、翌朝、品川へ行こうとしているのです。船が日本列島中を駆け巡っていたのです。これは福井県立図書館にある江戸時代の港の貴重な図です。山の中まで河川沿いに地名が入っている。つまり、日本列島中港だらけだった。日本列島が水運という交通インフラで囲まれていたんです。

小舟でどんどん上流に向かって行く。最後は曳舟です。これは横山大観の曳舟という掛け軸で、剛力2人で引っ張っている。滝が描かれています。このように山奥の溪谷のところまで何かを運んでいるのです。何を運んでいると思いますか？

江戸に向かうときは、みかんとかお米とか木材を運んで行きます。帰りは荷物を下ろして空荷だと船はひっくり返ります。何か積まなきゃいけない。重たいものをいっぱい。その一つが瓦版です。浮世絵です。これ黒船の瓦版ですね。つまり全国の津々浦々の全ての日本人が瓦版を読んでいたんです。よく日本人の識字率が高いと言われるのは寺子屋があったからと言われる。寺小屋などなくても、瓦版をみんな読みたくて親父やお袋さんに字を習って瓦版を読んでいたと思うのです。

赤穂浪士が討ち入りして10日後には、全国の人が赤穂浪士の討ち入りを瓦版で知っていたと言われています。明治になって外国人がびっくりしたのは、路地で男の子がしゃがんで瓦版を読んでいる。そんな国はない、子どもというのは労働の下働きで何か

ものを読むなんてあり得ない。ものすごくびっくりしたそうです。日本人って一体なんなんだと。

江戸の情報が津々浦々まで広がって、全国の人が江戸のことを知っていた。面白おかしいことから、黒船が来たということまで。交通インフラとしての水運が、日本列島中を川を通じて情報を運んでいた。話し言葉は参勤交代で人が話すことで伝わり、文字・情報は江戸の帰り船に瓦版や浮世絵を目一杯積んだ。江戸中に集まる全国の工芸品、紅とかの物を運んだ。物というのは情報ですから。日本中の人たちが文字と情報を共有していた、というのが江戸時代の日本人です。

共同体

文字と言葉を共有した日本人、共通の言葉と情報を共有していたら共同体です。日本人という共同体です。共同体の条件は、同じ言葉を喋って同じ情報を持っていることです。他人というのは言葉が通じない、同じ情報を持っていない。日本人は共同体だったのです、離れてすんでいても。

だから一気に東京に集まった。そのことをトインビーは理解してなかった。つまり、江戸は全国の人が作った場所で、言葉も情報も、いろいろなメモリーも江戸のもの。江戸というのが日本の共同体の原点なんです。言葉と情報です。

全国の人々の力と資金と技術が作った江戸です。東京の人が作ったんじゃない。江戸は全国の人語り草であり、誇りの街なのです。日本人の誇るべき街、日本人のアイデンティティーの街です。江戸への帰属意識です。

欧米がアフリカ、中東、アジアの国を植民地に何をしたのかと言うと、その国の内部分裂を起こすんです。典型的なのはイギリスがインドで部族間の言葉が違うのを利用して、内部分裂を起こして内戦を起こさせました。アメリカもハワイへ行って部族の言葉が違うのを利用してカメハメハ大王を滅ぼさせちゃいました。内部抗争を誘発させたのです。

日本も最初は長州にイギリスがついて、幕府にフランスがついた。イギリスとフランスは日本を分裂

■ 基調講演 江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏

させる作戦だった。ところが、日本人は若い奴が集まって日本語で喧嘩が始まった。日本語で喧嘩が始まったらそれは共同体内部の諍いです。彼らの周りには、言葉が異なる外国人が困っていた。違う言葉だと敵ですね。欧米列国が日本を植民地にできなかったのは、同じ言語で同じ文字で、同じ情報を持っていた日本人が近代に向かっていったからです。

廃藩置県は思いのほか簡単にいったと思います。列島の地形で分断され、流域に封じられていた幕藩封建体制、僕は流域封建体制と呼びたいのです。流域の中に閉じ込められた権力、それが江戸時代だったのです。この流域共同体が壊れれば、東京に集まってしまうのです。

大久保利通が明治3年の鉄道に感動して、一気に日本全国の国鉄に投資していくんです。大隈さんと伊藤さんが蒸気機関車やろうと言い出したとき、最初反対したんですよ、無駄だって。大久保と西郷は反対したんだけど、大久保はテープカットで乗った日に応援団になった。何故かと言うと、この蒸気機関車は地形を乗り越える。流域を横断できることを理解したのです。日本列島中に鉄道を敷いて東京に向わせる。長男を除いた次男坊とかの若い人はみんな飛び乗ったんです。

東京への集中

東京に住んでいる人は3代ぐらい遡るのが精一杯です。4代前に江戸にいた言う人はほとんどいない、数えるほどです。ほとんどの人が地方から来た人、お父さんとかおじいさんが。みんな鉄道に飛び乗ったんです。この蒸気機関車がインフラとして、一気に東京に一極集中を起こし、すごい勢いで東京が発達していくのです。

理由を整理すると、集中する場所としての関東平野があった。大阪や京都、名古屋は土地がないんです。関東平野だけです、人口が一斉に集まれるのは。トインビーが人類の奇跡だといった奇跡の裏には、400年前に徳川家康が利根川東遷などで関東平野を作っていたからです。

それと全国に水運という情報の蜘蛛の巣のような

ネットワークがあった。参勤交代でみんな江戸弁を理解でき、コミュニケーションができた。そして情報を共有していた。これが日本人の幕末の姿です。欧米列国が日本人を分断しようとしたが失敗して、結局フランスは撤退してイギリスだけが残った。それが日本国の江戸から東京への物語です。家康が作った関東平野、言葉と情報とメモリーの江戸の物語です。



地方分散へ

近代は東京に集中しました。集中しすぎたのが問題になっています。東京にこれだけ集中したら、大災害があれば日本の存続は難しくなります。首都圏に人口の三分之一が集まっている、これは異常です。江戸から近代になるときはやむを得なかった。国民の力を集中しなければ、欧米列国に植民地にされてしまったからです。力を集中させるにはこれで良かったのですが、これからは違います。

これからの時代は分散型だと思います。この図は分散型を表現したものです。エネルギーの分散が必要だという説明の図面です。大きな丸が九電力会社で、全て電力を供給している図です。これからはそうじゃない。大都会例えば東京や横浜には大電力を送らないとダメです。でも中核都市、地方都市は分散型の水力や風力やバイオで十分やっていける。これが将来のエネルギーの姿だとの説明の図面です。

文明のあり方も分散にして行かなければ危険です。人類または生物が生き残っていくには、集中しちゃうと滅びるんです。分散してやっと生き残っている

■ 基調講演 江戸・東京誕生の謎 日本人のアイデンティティー 竹村 公太郎氏

のです。集中しているところにウィルスが来れば、ドーンといっぺんにやられてしまう。あちこちに住んでいて、ウィルスや大地震が来たら、その場所は被害を受ける。しかし、他は地域は生き残る。これから 50 年 100 年後には分散型の社会にしていけないとダメです。

生物の進化を見ていれば分かります。生物の進化は分散して生き残っているのです。集中して同じ種だったら滅びていきます。貴重種は大事だけど滅ぶ運命なのです。同じ遺伝子はダメです。遺伝子は交換しなきゃダメです。男と女が結婚して子どもを産むというのは違った人間を産むことです。同じ人間ではないのです。同じ人間は危ないのです。

生物の進化は分岐して、多様性を持って存続が保たれている。だから集中は退化なんです。進化というのはダイバート・分岐していくということです。日本は東京へ集中して近代国家を成し遂げました。これからは東京から分散していけないとダメです。分散とよく言われますが、本気で分散していけないといけません。エネルギーがあるのは地方ですから。地方はエネルギーで自立して、その地域で利用していく、これからは真剣に分散を考えなければいけないと思います。

河川法の環境

平成 9 年に「環境」目的を河川法に入れました。明治 29 年に「治水」で始まって、昭和 39 年に「利水」を入れたんです。平成 9 年に「環境」を入れました。第 1 条の目的を変えたのです。これは凄いことです。法体系全体の性格を変えたのですから。当時、開発課長をやっていて、霞ヶ関全体が反対しガンガン文句言われました。

「河川行政が環境を大切にするのは分かった」「だから、第 x x 条の『環境に配慮した工事をやれ、環境に配慮した整備計画を作れ』それでいいじゃないか」と。「ダメだ、1 条に入れて環境そのものを目的にしなければダメだ」と頑張った。配慮事項じゃなく「工事をやりたいが為の環境じゃない。環境そのものが河川行政の目的だ」と頑張り抜きました。

なぜ法的に反対されたかという、「治水と利水は罰則規定がある」、国土管理法で罰則規定がないのは、法律要件に合わない」「罰則規定は作れるの？環境で」「罰則規定を並べてみろよ」ときた。罰則規定なんて出っこない。「環境を僕たちは目的としてやるんだ」「罰則規定はない」と僕たちは頑張ったんです。「お前たちは自分たちの心の思いを法律にしようというのは無理だ。ルールから外れる」と厳しかったですよ。

でも、ヤンチャして駄々こねて踏ん張って、とうとう第 1 条に入りました。入って河川行政どうなったかという、それまで僕たちは市民団体が環境活動をするのを見張っていたんです。今だから言えるんです。「反対派がまた自分たちのところに来るんじゃないか」とかと。ウォッチじゃなくて見張っていたんです、各事務所が。

ところが「環境」を入れた瞬間、現場事務所の職員が一緒になって環境活動しだした。出張所の職員たちがニコニコして市民団体と環境の話をしている。そうやってどんどん変化しているのです。だから何十年か後の改正ではエネルギーとかレクリエーションが河川法の目的に入る、入れるべきだと言っているのが、私たちの水都東京未来会議の合言葉です。

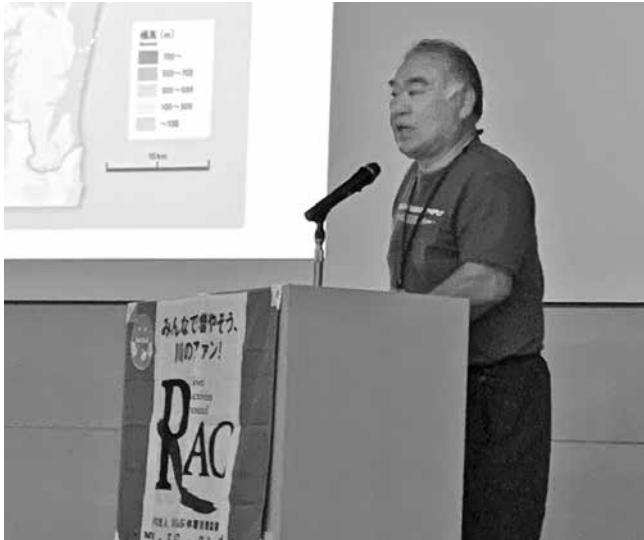
河川法の第 1 条にはエネルギーの最大利用とかまたはレクリエーションの興に供する物、国民に。そうするとやることがいっぱいまた出てきます。仕事が増えますが、事業が増えることだけではなく、仲間が増えていくという事です。

この RAC 活動は、皆さん方楽しんでやっておられます。それだけではなく、将来の河川法の第 1 条に国民のレクリエーションに供する、というすごいゴールがあるということ思ってください。僕たち水都東京未来会議のテーマですけど、ぜひ皆様方も仲間になっていただけたらなと思っております。以上が私の講演です。どうもご清聴ありがとうございました。

■ 全国活動事例発表

下北ジオパークで学ぶ自然体験&防災活動

相馬 孝氏 (小川原湖自然楽校)



皆さんこんにちは、私が住んでいるところは下北半島の付け根あたりになります。青森県で一番大きな湖がありまして、小川原湖というところなのですが、そこの岸边から10メートルぐらいのところで寝泊まりしているんです、毎日。そういうところにいるんですけれども、今日は、下北で先日終わった防災キャンプの話をさせていただきたいなと思っています。皆さん下北半島って知ってます？本州のてっぺんです。よく北の端と言われるんだけれども、北の端じゃなくて本州のてっぺんですからね。この何がいいかというと、見ての通り太平洋と津軽海峡、そして陸奥湾に接しています。3方を海に囲まれているという非常に素晴らしいところがあります。

最近ジオパークという言葉をよく耳にするかと思いますが、下北にも素晴らしいジオパークがいっぱいあります。皆さん、日本列島の起源ってご存知ですか？どれぐらいまで遡るのかというと、大体1億5千万年前まで遡ります。その頃、まだ日本列島はできていなかったんですね。アジア大陸の東の外れで何となくという感じでいましたけれども、これわかります？下北ジオパークの模様なんですけど、一番右側が紫ですよ。左側が濃い茶色、黄土色があってグリーンがあって、この4つの地層が日本を

形成していると言われています。日本を形成している4つの地層が下北に来るとみんな見られるんですよ。すごいでしょ、下北って。これも最近知った話ですけれども、この地形の色分けをしているエリア。これが下北を形成している4つの層です。この中で、ここに5つのカルデラがあります。で、その一番大きい大畑のカルデラというのがあるんですが、ここには下北でちょっと有名な大畑川という川が流れています。サクラマスとかで有名なところですよ。今回は、大畑川の辺りで防災キャンプをしました。ということで、その話をさせていただきます。

防災キャンプは1泊2日なんですけども、初日の初めは青森ヒバを使ったMy箸作りですね。今回初めてみんな作ってるんですけども、青森ヒバの匂いが最高です。先ほど竹村先生の北前船の就航図が出てきましたが、かつては青森からは青森ヒバが大量に西の方に北前船を使って運ばれています。能登に今、青森ヒバが生育しているんですけれども、それは途中で能登に降ろしたものが芽を持ってて、そこで繁殖をしたやつが多分残ってるんだと思います。そうやって青森ヒバがかつてはあちこちにいました。ということで、子ども達には青森ヒバを使ってMy箸作り、それから今回やったのは環境教育ですね。プロジェクトWETという水に関する環境教育プログラムですが、その一つをやって子ども達の心を掴みました。

その次は自分たちの寝床を作るということで、ブルーシートを使ったティピー作りですね。これは以前に作ったティピーですが、大きいブルーシート2枚あればこのティピーができます。大体4メートルの底辺になるので、子ども達だったら10人ぐらいまで寝られます。8月だったので、ちょっと虫が多くて端の方は虫が侵入して来たいみたいですけども。防災として、どこにでもある物を利用したとりあえずのシェルター作りということで、ブルーシートでのティピー作りでした。

■全国活動事例発表 下北ジオパークで学ぶ自然体験&防災活動

防災の観点からすると川が一番いいんですが、残念ながら青森県というのはその水害の対処というか観念がないんですね。要は、平地に人は住んでいるんですが、あまり今までに水害が起こったことがありません。私のいる小川原湖でも、周りは高台になっているので、昭和33年に一度水害の被害があった以外はもう全然水害がなくて、だから逆に防災という話をしても、地元の人たちはちんぷんかんぷんなんです。ところが今回やった下北は、去年の8月に大畑川流域でかなりの被害が出ました。今年の夏もまた、水害に追われて、下にある養魚場が流されてしまったり魚が流されてしまったりとか、そんな話もありました。そのようなこともあり、下北に関して言えばむつ市の人間は、他の同県の人たちと比べると防災の意識が多少はあるような感じがします。

ということで、さっきの大畑川でまずは川の流れですね。実は子どもたち6人参加したんですけども、そのうちの二人は、これをやりたいといって参加した男の子と女の子でした。でも今の子どもって身長はありますが、みんな細いですよね。その子たちってまず水に長く入れません。筋肉が付いていないので、自分の体を守ることがなかなかできないですね、熱量に関して言えば。だから私はわりと筋肉付いているので、いくらでも水の中に入っていられるんですが、そういう感覚は、最近の子どもたちはちょっと疎いというか足りないですね。

川に入ったらまず、ライフジャケットは浮くんだよということを体験します。次はそのままライフジャケットで流れました。その次はレスキューに関してなんですけども、まずはスローロープなどを使った助け合いですね。いつも車にはスローロープを必ず積んであるので、そういう話もするんですが、スローロープがない状況でどう助けるか、何が使えるのかを考える。遊びに行くにしてもペットボトルの1、2本は持っている可能性は高いでしょうから、それを使うとしてどう使うのか、生きるためには息ができないとダメなんで、顎の下に入れて、まず気管の確保をする。そういうことを普段からやっていく為に一番良いやり方かなと思います。

夜はお決まりの空き缶でのご飯です。手前の新聞紙を載せてあるのがご飯の方で、こっちの方はカレーなんですけれども、このために全部飲みました。子どもたちのために。久しぶりにやったんですけども、お陰でいい御飯が炊けました。この空き缶で作るカレーも意外と簡単です。材料も細かく切って入れるとすごく早く煮えてくるので、これも実際にはありかなと思っております。

最後は、防災に関係はないんですけども、自然体験ということでお世話になったお寺の池でガサガサもしました。その締めは座禅なんですけども、皆さん座禅してたことありますか？ルールがあるみたいで、座るものに関しても、正式になると自分のMy座布団を用意してやるようです。私が一回はやってもらいたかったのが、警策を使ってポンって肩たたきしてもらってたんですね。初めてやったんですが、意外と面白かったです。今回はお寺を最後に使わせてもらって体験の締めくくりとしたんですけど、こういう関係もまたありかなと思っています。ということでちょっと短いんですけども、防災キャンプを青森で行った、という話をさせていただきました。どうもありがとうございました。



■ 全国活動事例発表

できることからはじめてみたヤングケアラーとの小さな水辺遊び

前川 勝人氏（琵琶湖・淀川流域圏連携交流会）



皆さん、こんにちは、前川勝人といいます。名前の中に川と人があるということで、自ら「がわと」と名乗り、川と人を繋げる活動をしています。具体的には色々な大学の研究サポートや小学生を対象とした川を学ぶ講座、水防災の講座などを実施していますが、メインは川遊びで、よく活動しているところが琵琶湖です。この動画は、近江舞子の湖岸に寝っ転がって撮ったものですが、見ていてだけで心が休まります。こんな場所で趣味のSUPをしているのですが、湖岸で遊んでいる子ども達を見つけると、ライジャケを着せて琵琶湖に入れちゃいます。たまにお父さんにも着せて、子どもと一緒に入れちゃったりもします。お母さんはちょっと心配そうに見ている状態の写真です。では次、子ども達がSUPに乗っている写真です。SUPに乗せてあげると子ども達は大喜びします。この子達は三重から来ていた三姉妹ですが、この日は少し雨が降る曇天だったんです。寂しそうにしていたので、じゃSUP乗るか〜?と声を掛けました。ほかに、水に浮かぶ時のラッコのポーズを教えたりしました。そして次、この子達は海外の子ども達ですね。海外の人達も琵琶湖で遊んで、楽しく過ごした思い出をお土産に帰ってもらう。というように琵琶湖で、こんな感じで活動しています。

何故、このような活動をはじめたかという、4年ほど前に滋賀県のイベントで「世界中の子どもを琵琶湖で洗う」という宣言をしたからなんです。ただ、その活動を始めてしばらくしてコロナ禍となり、活動ができなくなってしまいました。そんな時期を乗り越え、この夏、ヤングケアラーとの小さな水辺遊びというプログラムをやりました。僕の場合、個人的な活動なので大きなことはできないのですが、その代わり即行動にうつせる。とりあえず「できることから始めてみよう」ということで準備を始めました。

きっかけはヤングケアラーの子供達を支援しているケースワーカーが企画した湖岸キャンプで水辺遊びをやりたいということだったのですが、資金がないし、賛同者もないし、行政の支援体制も準備中ということで実施してくれる人が、見つからない。そんな状態であることを地元の方から相談を受けました。相談を受けた途端に「じゃあ、僕がやります」って即答しましたが、内心は「本当にできるのだろうか」と不安でした。いろんな事情を抱えている子ども達のフォローは、どうしたらいいのか、と考えながらも「川好きさんを増やしたい」という思いの方が勝ってしまって、気が付いたら繋がりのある大学からEボートを借りていました。最初は参加する子ども達が2、3人と聞いていたのですが、水辺遊びができると聞いてどんどん増えたのですね、おそらく。最終的には10人



■全国活動事例発表 できることからはじめてみたヤングケアラーとの小さな水辺遊び

くらいになっていました。そうすると自前のSUP4つでは足りない。Eボートが必要、スタッフも集めなくてはということで、川仲間に声を掛けました。さらに、もう1つ課題があって、当日どうやって川遊びのルールを教えるか。これまで、ヤングケアラーの子ども達と接したことが全くない。子ども達にしたら知らない大人から、いきなり厳しいルールを説明されて、せっかく遊びに来たのに楽しくない。警戒心が強まるのではないかと。子ども達がやりたいことは全部OKにしてあげたいし、後方支援をしながら見守る姿勢を徹底したい。子ども達を自由に、ルールは必要最低限に守ってくれたらいい。そのためには、子ども達に気づかれないよう密かに安全確保を図る体制を作らないと駄目だなと考えました。その考えに賛同してくれた川仲間が「前川さん、いつも通りでいいんじゃないですか、全力で遊ぶ大人を見せたらいいんじゃないですか」と言いました。ああ、なるほどね。その言葉でモヤモヤが消え、水辺遊びの方向性が決まりました。全力で遊ぶ大人達の姿は、子ども達の心のハードルを下げたようで、思い切り琵琶湖に飛び込み、気が付けば、みんな水浸し、力を合わせてEボートを漕ぎ、SUPも好きなように乗っていました。子どもから「競争せえへんか？」挑戦を申し込まれて嬉しかった。大人も子どもも中身は小学3年生、同級生のように遊び、全員が最後までルールを守り、しっかりと話を聞いてくれて楽しく過ごせました。

今回、実施して気にしていたことは、本当に彼らの力になれたのか？ということでしたが、当日、見せてくれた子ども達の姿と、お礼のメッセージに答えが出ていました。短い時間であったけれど、子ども達が本来の子どもらしさを発散し、支援する大人達も一緒に楽しみながら、子ども達を見守る場ができていたようです。ヤングケアラーの子ども達は、中高生なのですが、家族の世話などで自分の時間が取りづらいということがあり、勉強の時間を確保するのもなかなかできず両立が難しい。そんな状況を少しでも忘れ、安らげる時間ができたのが、水辺遊びの効果だったと思っています。

この写真は一緒に連携していただいた民宿白汀苑の今井さんです。今回、楽しく過ごす時間を少しづつで精一杯だったのですが、今後は共に活動してくれる仲間を集め、もっと大きな力にしたいと考えています。次の写真、一緒に頑張ってくれた摂南大学のエコシビル部の現役生とOB・OGの皆さんです。顧問の石田先生達と日吉ダムの天若湖に沈んだ家があった位置の湖面上に灯りをともす天若湖アートプロジェクトというのを行っており、その中に天若湖、巨椋池、琵琶湖を活動拠点にした3つの水たまりというイベントの一環で琵琶湖での水辺活動に協力をしていただきました。最後の写真となりますが、大阪から琵琶湖までEボートを運んでくださった摂南大学名誉教授の澤井先生です。隣に写っておられるのが、地元の方で嘉田さんです。一緒に取り組んでいただいた方々の紹介が終わったところで僕の発表は、以上になります。ありがとうございました。



■ 全国活動事例発表

資料館「リバーパル五ヶ瀬川」での体験活動

山田 大志氏 (NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワーク)



山田氏：

皆さんこんにちは。宮崎県延岡市から来ました山田といいます。今日、延岡から二人で参加しました。せっかくお上りしたので、二人で発表をしようと急ぎょステージ上に上がってもらいました。私、山田と

大貫氏：

大貫です。よろしくお願いします。

私たちは、河川資料館リバーパル五ヶ瀬川を拠点とした体験活動事例を報告します。宮崎県北部を流れる五ヶ瀬川は、九州中央山地に位置する五ヶ瀬町を源流として東に流れ、延岡市街地上流で大瀬川を分流し、河口付近にて祝子川・北川を合わせ日向灘に注ぎます。9年連続で水質全国トップクラスを保持しており、魚だけでなく希少植物や昆虫など多様な生き物で溢れており、自然豊かな環境が保持されています。その清流から秋には市街地に300年の歴史を持つ日本最大規模の鮎築がかかります。今現在かかっている最中なので、もし機会があれば遊びに来てください。また、市街地で川遊びも楽しむことができます。ほかにも国の名勝天然記念物に指定されている高千穂橋を代表として、自然景観にも恵まれています。綱野瀬川と五ヶ瀬川の合流点に架かる鉄筋コンクリートの連続アーチ橋梁で、戦前最大級のスパンを有している綱ノ瀬橋梁や、五ヶ瀬川に設置された畳堤は土木遺産に選奨されています。畳堤は長良川、揖保川と五ヶ瀬川にのみ現存す

る建造物で、五ヶ瀬川の畳堤は大正末期から昭和初期に設置された最古のものです。今でも980メートルが現存しています。

山田氏：

という五ヶ瀬川で、とても自然と歴史文化のあふれる場所ですので、ぜひ九州、遠いですが、お越しいただければと思います。引き続いて、私たちが管理運営する河川資料館リバーパル五ヶ瀬川の活動についてご紹介させていただきたいと思います。このリバーパル五ヶ瀬川は先程の五ヶ瀬川、大瀬川、祝子川、北川の河口に位置しておりまして、先ほど竹村先生のご講演にもありましたように、河川法に環境が入ったということで、環境に配慮した工事がなされたところでございます。

この資料館の目の前には広大な干潟が広がっておりまして、この写真のように子どもたちに環境学習、干潟の生き物観察会などを行っております。その広大な干潟にはたくさんの動植物が住んでいます。右の魚はアカメですね。上のカニさんはハクセンシオマネキです。絶滅危惧種ではありますが、うじゃうじやと生息するようなとても豊かな環境が残っています。また、どしゃぶりハウスというものもございまして、20ミリ、50ミリ、70ミリ、100ミリ、187ミリの雨の体験ができる場所もございます。

また、この雨の体験を実際に身をもって知ることによって小さいお子さんもですね、洪水についてですとか、考えるきっかけになっております。とても小学校の遠足の人気プログラムとなっています。他にも、川に関する展示などを行っておりまして、愛鳥週間にはバードカービング、鳥の彫刻と野鳥写真展、また今年は宮崎大学の学生さんと一緒にサステナブル水族館ということで、たくさんのお子さんに楽しんでいただきました。その他、五ヶ瀬川についての情報や水害、津波等に関する展示もしているところです。その他、私たち力ヌー体験を平成14年から継続して行っておりまして、たくさんの方に水辺に親しむ機会を提供しておりまして、今年は17回の受入れで延べ500名の方々

■ 全国活動事例発表 資料館「リバーパル五ヶ瀬川」での体験活動



に体験をしていただきました。また地域の魅力を知ろうということで、各学校のそばに小さな川が流れていますけれども、そういった河川でも体験をしているところですよ。

他にも様々なイベントを企画しておりまして、左下は葦を束ねて作った葦舟ですね。左は普通の船ですけど、丸いのは子どもたちに募集をして、どんな形の葦舟を作ろうかというところで葦ドングリ号というのができました。ただ、形が丸いので漕いでも漕いでもくるくるその場で回っているだけというものでしたが、子どもたちはとても喜んでくれました。右の写真はですね、リバーフェスタ延岡というイベントですね。平成5年から29年まで行ってきました。ふるさとの川を再発見しようということで続けてきました。

これまで2万人以上の方にご参加いただきましたが、平成30年からは川遊び in 五ヶ瀬川ということで、川の安全についてもより知ってもらおうということで、名前を変えて継続しています。ただ、色々イベントをしてきたんですけども、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で全てのイベントが中止。当館も2019年の4か月の休館の要請がございました。まだ延岡は1名も出ていないという状況で、休館要請がかりました。翌日のイベントも中止になってしまいました。野外活動が中心なので、感染対策も取りながら実施できるのではないかなと思えるのですが、一律で自粛要請が掛かるので、企画しては中止の繰り返しでした。皆さんのところも同じような状況があったんじゃないかなと思います。

ないかなと思います。ただし小学校ですとか、児童クラブというのは通常通りの活動が行われていました。私たちは屋外の活動ということで、いつも以上に問い合わせをたくさんいただきました。中がダメなら資料館を使えないので、外に出ようということで小学校にお声掛けをして、このように河川の安全ですとか環境学習、カヌー体験を企画しました。予算については国交省さんから委託をいただいたりとか、市の教育委員会に学校の方から予算申請をしていただいで運営をしました。

閉館中でも再開、開館に向けて色々取り組んでいこうということで、館内の感染対策は勿論ですけども、ホームページ情報の充実、河川の安全についてですとか、環境について、ライフジャケット等について掲載しました。また、感染防止対策としてイベント前に事前チェックシートというのを出していただくようお願いしました。また、申し込みについても、これはGoogleフォームの受付に全て変更しました。このGoogleフォーム、感染事前チェックとかですね、RACの部会の時に別の方からお伺いをして、うちもやってみようと思って作りました。こういった情報の共有ができるというのがRACの強みかなと感じました。また、イベントのチラシを作って学校に配布して中止になって、という繰り返しでしたので、そのリスクを防ぐために、小規模のイベントをたくさん開催しようということでLINEも開設しました。イベントに参加したことがある方々にご案内をして登録してもらい、今163名の方に登録いただいています。数は少ないんですけども、家族でいうと500名ぐらいのとても優良なお客さん達がリピーターとして、参加していただいております。

ただ、どうしても県外を跨ぐようなイベントというのはなかなかすることができなくて、オンライン、ズーム等を活用して様々なイベントを行ってきました。右の九州川のワークショップには、29の団体さんが発表されて、大体250名ぐらいの方が参加していただきました。なかなか直接会えないけど、情報共有はしたいなということで行ったところです。また、そのワークショップのグランプリ団体も招いてリバークルー

■ 全国活動事例発表 資料館「リバーパル五ヶ瀬川」での体験活動



ミーティング他、講習会など開いてきました。今、九州で河川協力団体の連絡会議が活発に動いているんですけども、その43団体で協力して、こうしたイベントを企画しています。因みに河川協力団体連絡会議は6つのチームに分かれていて、水防災とか環境とか仲間づくりなどに、みんなで力を合わせて取り組んでいるところです。最後になりますが、リバーパル五ヶ瀬川の活動も感染対策を取りながら、通常通りの活動が再開されました。新型コロナの感染拡大でイベントが開催できないとか、失ったこともたくさんあったんですが、さっき言った様々なツールの活用ということもこういったことがないと多分しなかっただろうなと思いますし、新規の団体に関心を持ってくくださる方というのともとても増えてきました。今年3つ嬉しいことがあって、一つは延岡に大学が一つだけあるのですが、その大学から野外活動したいということでお声掛けがあって、学生さんのインターンシップの受け入れが開始されました。約30名ぐらいの学生さんにお手伝いに来ていただいています。あともう一つは、この真ん中のカヌーの写真なんですけど、小規模校、10数名程度の中学校向けのカヌー体験を継続して活動を行ないたいということで、河川基金に申請しますとのお話を先週いただきました。申請書が届いて見てくれということで、大変嬉しかったです。もう一つは、今週の水曜日に、延岡市の保育協議会の研修でぜひうちの活動を紹介してくれ、ということでお話をする機会をい

ただきました。うちのプログラムも一部体験していただいたんですけども、こういったことが続くそうですね、何て言うんでしょう。with コロナ時代、先ほど課長も仰られていましたが、私達に風が向いてるんじゃないかという気がするというか、確信を持っているところです。

先ほどご講演いただいた中でですね、江戸が共同体の原点であるというお話を拝聴し、延岡から江戸に来てですね、皆さんと共同体として、皆さんと色々な情報交換をこの全国大会でさせていただき、それをまた延岡に持ち帰って情報交換をして。RACをもっともっと盛り上げていきたいなと思った次第です。宴会もあるそうなのでどうぞよろしくお願いします。以上で発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



■全国活動事例発表

RAC 本部での体験活動～コロナ禍における東京都の「子どもを笑顔にするプロジェクト」など

大井 里美氏（NPO法人川に学ぶ体験活動協議会）



皆さんこんにちは。今日はお忙しいところどうもありがとうございます。本当にたくさんの方に来ていただいて、少しほっとしております。RACの素敵な川遊びですが、全国の会員団体の方々がいろいろな所で様々な活動をされていますが、RAC本体でも人が足りない中で、あっち行ったりこっち行ったりという活動しています。コロナ禍で2020・21年となかなか事業がなくて川遊びが全然できない状態でしたが、その中で、新潟の信濃川下流でやすらぎ堤という場所がありまして、そこで毎年川まつりをやっています。その川まつりでEボート乗船会など、コロナの感染に注意をしながらやってきました。Eボートに乗る時にパドルを拭いたり、感染への注意をしながら、2019年、2020年、2021年と3年間やってきました。また、そのやすらぎ堤では、スノーピークさんがテントを張り、屋外での講習会というのも開催しました。リスクマネジメント講座を開催したのですが、スノーピークさんのテントの中で、河川管理者やイベント業者の方々、総勢40名ぐらい集まり、川の体験活動をする際のリスク管理の講習会をやりました。この写真はついこの間、8月にやったものです。信濃川に昭和大橋というところがありまして、そこで、Eボートの乗船会をやり、80名くらいの方々に参加していただきました。この川を見るとわかるんですけど、階段護岸で柵がないんです。よく近所の人が散歩に来る

ので、こんな所でEボートに乗れるのかと言って、飛び入りで家族の方が乗ったりと、子どもさんもたくさん乗られました。下流部なのであまり綺麗な川ではないのですが、スローロープ体験で川に入ったりして、みんな勇気あるなと思って（笑）。前の事務局長もよく飛び込んで、こういうスローロープ体験とか救助体験というのはやっていたんです。この活動は、多分来年もやられるということなので、引き続きずっとやっていけたら楽しいのかなと思っています。

これも河川事務所の事業ですけども、木曽川下流河川事務所の事業でお仕事をいただいた時のものです。これは揖斐川ですね。揖斐川での体験活動で、桑名市の職員の方々に体験していただき、揖斐川にEボートで出ていったんですが、私も乗ったんですが、何かこう、皆さん漕いでる時の目の色の輝きが全然違って、普段陸の上から見てる川とEボートに乗って見るのとでは全然違いますねって言ってました。こういう体験を市の職員さんとか河川事務所の方々がやられると、とても楽しいかなと私は思っております。

これはついこの間ですが、東京都事業なんですね。「子どもを笑顔にするプロジェクト」というものです。うちの事務所が北区なんですけど、すぐ隣の豊島区の巣鴨小学校の先生から連絡がありまして、48人の子どもをEボートに乗せられないかって。そんなにたくさん子どもたちを乗せたことはまずないので、とても迷いました。迷ったのですが、新たに子ども用のパドルを50本買って準備をして、6艇のEボートでやることにいたしました。ここに写っているのが荒川ロックゲートですね。子どもたちが8名ずつ乗って、この荒川ロックゲートを越えて行きました。水位を上昇させる際に待っている間も、子どもたちがもうすごい騒いで、男の子と女の子が言い合いをするんです。どうのこうのとか言いながら男の子と女の子が水の掛け合いをして。でも水の掛け合いが一番喜んだのはまさかの校長先生でした。校長先生、帰ってきたらずぶ濡れでした（笑）。こういう東京都の事業があるので、他の学校でもいろいろ活用ができればいいのかなと。E

■ 全国活動事例発表 RAC 本部での体験活動



ボートはとても自然にも親しめるし、東京都内でこういうことができるというのはとても素晴らしいことだと思います。事務所に近い北区の周辺の小学校にもやりませんか？という営業を今後しようかなと思っています。

これは以前にもちょっとお話ししたと思いますが、東京観光財団というのがございます。そちらと協力をして、環境会議で日本に来た環境委員の方々のエクスカージョンとして、旧中川をEボートで下ってゴミ拾いをする企画があります。プラスチックボトルフィッシングってかっこいい名前ですが、ゴミ拾いですね。今後こういう活動も展開していこうと思っています。まさに昨日、日立製作所の方々から40名の外国人の方を乗せたいという依頼があったんですが、残念ながらキャンセルになってしまいました。しかし今後、来年に向けてもっとたくさんの企業から連絡が来ればいいかなと、RACの名前を世界に轟かせたいなと思っています。英語版の説明などもたくさん作っておりますので、今後ちょっと楽しい事業になると思います。

これはこの後のパネルディスカッションのコーディネーターをお願いしている水辺総研の岩本唯史さんが、ミズベリング関係でやっておられることで、RACはちょっとお手伝いをしています。江東区の汐浜運河という場所でEボートレース大会というのをやりました。汐浜運河周辺の企業の方々、竹中工務店さんや

HISさん、スカパーさん、東陽町の町会の方々がみんな参加してEボートレースをします。立派なカップも作ってあるので、それを争ってのEボートレース大会です。ここのEボートレース大会というのは、Eボートに乗って楽しむだけではなくて、地域防災にも役立つような形で開催をされています。今後、これも汐浜運河だけではなくて、亀島川だったり、日本橋川だったり、そういうところでこのようなEボートに乗りながら防災のことも考えられる機会ができればいいのかなと思っています。

これはライフジャケットの啓発動画です。河川財団さんと一緒に、ライフジャケットの着方や川の安全についての動画作りの際に、安全に対してのサポートをしたものです。こういうこともやっております。すごい流れが急だったんですけども、小さい子どもが流されるという、そのような内容の動画作成のお手伝いをしました。他にもライフジャケットの着方の撮影などもサポートをしています。

最後になりますが、水難事故防止ポータルサイト。これはできたばかりだと思いますが、国土交通省の方はご存じではないでしょうか。RACのライフジャケットの安全認定マークに関してもしっかりと扱われていて、川と船舶用とのライフジャケットの違いという点にも触れており、川遊び用のライフジャケットを選ぶ際には参考にいただければと思います。国土交通省でもこの様なポータルサイトがありますので、是非ご確認ください。

私の話は以上になりますが、次にパネルディスカッションもありますので、ぜひ楽しんで聴いていただければと思います。明日は東京の水辺を存分に体験できるエクスカージョンもございますので、楽しみにしていただければと思います。ありがとうございました。

■ パネルディスカッション

「水都・東京の川の価値再発見」



コーディネーター：岩本 唯史氏

パネラー：土屋 信行氏

田村 祐司氏

鈴木 昇氏

陣内 秀信氏

コメンテーター：竹村 公太郎氏

岩本氏：

改めまして、水辺総研の岩本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。印象的で素晴らしいお話ばかりでしたね。竹村先生が河川開発課長さんだった頃、河川法改正をされる時にすごい戦いがあったというお話を聴けて、本当に今日来て良かったと思いました。その後の皆さんの活動内容も、川ってというのは本当に多くの人たちをインスパイアさせる場所だと感じずにいられない講演でございました。私が敬愛する前川さんのお話も本当に素晴らしく、心の中で応援していました。

ここからは東京の水辺の話題に戻して、皆さんとお話していきたいと思います。私のことをまずお話しさせていただくと、私が東京の水辺に関わり始めたのは、田中栄治さんという方に無理やり連れてこられたことがきっかけでした（笑）。僕も川のことをいろいろ頭でっかちに言っていたので、田中さんは「ちょっとお前、川に出てこい」と、無理やりEボートのポンプを渡されて。雪の中乗ったなんてこともありました、

本当にそういう無茶振りをする先輩がいたからこそ、私はこの壇に立たせていただいているんだなと思っています。その当時から比べると、本当に東京の水辺は隔世の感があるぐらいに変わったんですね。僕が関わるようになってからの20年の中でも変わったと感じられていますけど、先輩方の何十年ですね、あれから何十年ですけれども、活動されてきて、本当に変わったということがあるんじゃないかなと、それを皆さんと共有しながら、今どういう立ち位置に僕たちがいるのかということ整理できたら良いのではないかなと思っています。今どのフェーズにあるのか、それを共有しながら、東京の川の価値について、改めて皆さんと共にまとめていけると良いんじゃないかなと。それはひとえに、RACがこれから次の時代に合わせてどんな活動に注力していくべきか、ということへのエールになると思いますし、それからこの場にいる若い学生さんたちへも、自分がどう川や社会などに関わっていけばいいのか、ということへの先輩方からのエールになるんじゃないかと思っています。

私自身も国交省さんとのお付き合いでミズベリングというプロジェクトをさせていただいていますが、竹村さんからのお話があったとおり、昔はもう警察みたいだと感じざるを得なかった行政とのお付き合いも、この25年の河川法改正からは市民と一緒に環境を盛り上げていこうと、まさに官民連携時代の先を行くような、そんな関係を河川行政の方々はお作りになっていて、それはもちろんひたむきな市民活動家の皆さんの活動があってこそその賜物だと思うんですが、そんなきっかけがあったこと。それと観光流動時代ですね。このところコロナの影響で少し落ち着いていますが、それ以前はたくさんの観光客が日本に訪れていました。改めて、日本がどんなところを魅力として今後発信していくかを考えた時に、川だとか自然などは切っても切れないだろうと思いますので、そのあたりも多分キーワードだろうなと。あとは気候変動ですね。東京ということであれば、利根川が危なかった2019年の台風19号のことも呼び起こされます

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

けれど、近年もいろいろなところで気候変動が実感されるような激甚災害が起こっているということも踏まえ、私たちがどう付き合うか、ということも重要なポイントになりそうです。それから SDGS ですね。企業の活動の中にそういった取り組みが入ってきたことも踏まえて、私たちが今後、どういうふうに川とお付き合いしていけばいいのかがいろいろ見えてくると思いますので、そのあたりを踏まえながら、ここにいらっしゃるパネリストの皆さんにお話をお伺いしていきたいなと思います。この方々のお一人の話だけで2時間経過してもいいくらいのところ、本当にかいつまんで、それぞれ10分くらいで話してもらおうというかなり贅沢な時間になっておりますが、改めて私の方からパネリストの皆さんをご紹介差し上げたいと思います。

では一番右側から、「東京の水害対策・防災教育」についてお話しいたします、公益財団法人リバーフロント研究所の技術審議役の土屋信行さん。「川遊びと水難事故・ライフジャケット着用について」というお話をいただきます、東京海洋大学准教授、一般社団法人水難学会副会長でいらっしゃいます、田村祐司さん。「東京の川のある風景～川瀬巴水の浮世絵に学ぶ」株式会社ニフティー代表取締役、国際新版画協会会長でいらっしゃいます鈴木昇さん。「水都東京の舟運・歴史・観光」それ以外もぜひお話しいたきたいんですけども、法政大学名誉教授の陣内秀信さんの4名の皆さんでございます。最後には竹村さんにコメンテーターとして参加いただきます。それでは、皆さんにパネルディスカッションの前に各自のプレゼンテーションをお願いしたいと思います。トップバッターは土屋さんでございます。

土屋氏：

よろしくお願いいたします。岩本さんから、ちょっと東京の河川の流れというようにお話がありましたので、そこから入りたいと思います。これは実は東京の昭和の初めの頃の風景で、江戸川区の東の端、東堀という所ですが、この当時江戸川区内だけで水路の延長は440キロ。東京都内全域で僕のカウントですけど、1400キロって本当に細い水路が縦横無尽にありました。それが残念ながら、戦後高度成長期を迎える



とこれらの水路がまるでごみ捨て場ようになってしまった。環境悪化が酷い状態で、おまけに中性洗剤も加わって。戦後の発展の歴史で3種の神器と言われた中の一つである洗濯機が、大量にこの中性洗剤を川に流しました。下水道が整備されていない場所では、どの川もこんな状況になっていました。そして大河川の隅田川ですらこういう状況で、隅田川を渡る昔の電車は、誰かが「おおーい、隅田川だぞー！」などと車両の中で大きな声を出すんですね。そうすると、一斉に窓を閉めるんです。もう電車の中にとんでもない臭いが入ってきてしまう、そういう状況でした。こちらは多摩川です。この子たちはかわいそうに、今だったらどう考えてもこんな場所で釣りしないだろう、ということこんな状況の中で釣りをしていた。1970年代ですね。

さて、今は渋谷の大開発が進行中で、渋谷川などもですね、川らしいのか川らしくないのかはさておき、ちょっと表に出てきました。♪春の小川はさらさら～♪あまり歌の方はさらさらしていませんが(笑)、あの「春の小川」のテーマは渋谷川なんですね。浮世絵にはこんなふうに書かれておりますが、大正年間から汚れ始め、昭和30年代の高度経済成長期には水を流すためにコンクリートの大型のU字溝になってしまいました。渋谷川も1970年代はご多分に洩れず、ほぼごみ捨て場に化したわけでございます。そして、どんどんどんどん都市化の波に洗われて、地中に染み込む水の量、雨の量が減っていくと同時に、染み込めなかったいわゆる表面水のせいで、渋谷川が流さなきゃいけ

■パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

ない水の量もどんどん増え、そのたびにこの護岸が嵩上げされるという状況が生まれ、ますますU字溝のお化けになっていくわけですね。そんな中で戦後は大洪水が起きました。関東地方で最大、全国では1930人の命が失われるカスリーン台風というのが来しました。私と川との付き合いはここから始まります。実は私は、カスリーン台風の決壊現場である栗橋で生まれました。栗橋のそれも河川敷の中で生まれたものですから、私の戸籍は堤外地無番地と書いてあります。

岩本氏：

本当ですか！？

土屋氏：

本当です。川の子ということです。（会場笑）私は川で産まれた川の子でございますので、このカスリーン台風との切っても切れない縁で川と結び付けられておりますが、この時東京まで洪水がやってきて、川の恐ろしさをまざまざと東京都民は知ることになったわけです。その後、都内で非常に大きな被害を出した台風が、昭和33年に来た狩野川台風。荒川放水路ができて初めてと言ってもいいくらい、荒川に架けられていた橋梁がごとごとく流されました。ほとんど全滅状態ですね。このことを契機に、荒川放水路に架けられた橋が鉄橋化されていくわけです。同時に、大正年間からは工業用水を地下水に求めて、多くの井戸が掘られるようになり、そのために地盤沈下をしてしまいました。荒川放水路を見ていただくと、ここが荒川放水路ですけども、この荒川放水路の濃い紺色は地盤沈下が一番大きいエリアです。この辺りは地上に現存する観測井戸では4.5メートルの地盤沈下をしています。ちょうどこの中心部に荒川放水路がありまして、このまま地盤沈下の等高線を引くと、荒川のだ真ん中はたぶん5メートルぐらい地盤沈下しているというふうに絵が描けます。その地盤沈下の影響は、江東区墨田区というような江東デルタという中小内部河川にことごとく及んでいます。これはコンクリートで造った堤防の上に土嚢を載せているところですね。当時の土嚢は炭俵、南京袋、米俵に土を入れて1体60キロという大変大型の土嚢を作って嵩上げ堤防にしていますが、台風の接近に合わせて水位が上がってきている。

水防団、消防団が一生懸命頑張っていて、こういう作業をしてハラハラドキドキしていたわけです。

全体で見るとこれが干潮になっても堤防がなければ水が入ってきてしまう0メートル地帯、そして満潮になると水没する0メートル地帯、そして高潮が来ると水没するエリアということで、竹村先生に見せていただいたのと非常に近くなっていますね。地名を見ると草加市・越谷市、埼玉県南部地域も高潮のエリアということになります。東京だけで見るとあんまり気がつかないんですけども、埼玉県の辺りまで高潮になるということですね。これは伊勢湾台風が東京に再来したという条件でモデルを作っているんですが、今は東京湾最大高潮ということで、更にこれよりも広範囲に水没する室戸台風第2グループで今計算しているところです。そんな東京の堤防は、残念ながら非常に脆弱なところがあります。これは阪神淡路大震災のときの淀川の状況ですが、堤防が2キロに渡って崩れてしまいました。これは地震が1月だったので、台風時期から外れたお陰で復旧することはできました。東京の中川という川は東京都が管理しているんですが、中川堤防が崩れたら地震による洪水が発生してしまうだろうということで、内閣府は、首都直下地震が発生した際には江戸川地域に地震による洪水が起こる、という被害予測を作っております。なぜかという、満潮時の水位をちょっと描き入れてみますと…こうなります。1階水没、2階水没、3階の床、水没です。これが江戸川区の現実。これは江戸川区に限らず、都心側の墨田区・江東区・葛飾区・足立区にも当てはまります。いずれも0メートル地帯は1年365日、排水ポンプに頼ってポンプが働き続けてドライランドを得ている人工の乾いた土地なんです。だからとても堤防に頼っているということ、命の綱ですね。と同時に、ポンプも命の綱です。こういう地域が東京にはあるということを知っていただきたいなと思います。そしてこれは東京都の地図ですけども、このピンクは干潮時0、薄いピンクが満潮時0、そしてその外側は高潮エリアと。高潮エリアはなんと23区中17区が水没します。日本全国の株取引を一手に引き受けている東京証券取引所ですが、なんと1.9M水没です。ですから

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

日本の経済、文化の中核は非常に脆弱な場所にあるということが言えると思います。

ちょっと視点を変えて、今度は川との付き合いをどうしてきたのかというのをちょっと見ていただきたいんですけども、この間まで「危険この付近で魚釣りや遊んではいけません」川で遊ぶなって RAC と全く別のことを言っていたんですね。川で遊びましょうなんて言っていないですよ。河川管理者じゃなく PTA が遊ぶなって言ってるんです。「危ない。ここで遊ばないで」とこう、全国こんな形で川から子どもたちを遠ざけてきました。いや本当に、今隔世の感がありますが、これが現実でございました。そして一方、水難事故も起こっている。ここは水難事故が起こりましたよってことを皆さんにお知らせする、危ない場所だ。水難事故が起こるとこういう情報は出しますが、実際にはなかなか守ってくれないということもあってまた亡くなります。手前の方にあるこの花壇は、亡くなった方の霊を弔うためにお友達が作った花壇なんですよ。これはお隣、田村さんが副会長でらっしゃる水難学会さんの広報からちょっと拝借しているのですが…浅く見えるでしょ。男性は屈強なる若者でございますが、水難実験をされているんですね。スロープなので何となく入っていてもまたスロープで登ってこれると思ってしまふんですけど、登れないんですよ。一旦潜っちゃうと大変体は重たくなるし、下はヌルヌルしていたり泥が溜まっていたり、というような状況では本当に登れない。川のコンクリートブロックの表面もコケが付きます。そういうコケが付くと滑って上がれない。今年も子どもさんが流されて、お父さんが助けようと頑張って、助けに行ったらお父さんも一緒に、という例がたくさんありました。ここを見てください。子どもさんの重さを想定して 15 キロぐらいを持って、お父さん一生懸命子どもさん抱っこして出てこようとするんです。遊んでるんじゃないですよ。一生懸命なんです。駄目なんです。ここでは現実に 3 人の方が亡くなったんです。水難学会さんがそれを検証してどうやったら安全に助けられるかということを今検証しています。本当に安全に遊ぶためには様々なことをしなければなりません、河川管理上はこれやって

きちゃったんです。東京の川も新中川とか、全部ネットフェンスで囲ってしまって、今はきれいに遊べるようになっていますが、どうしても管理者が悪いついていう時代があったので、ようやくこの反省から遊べる環境をつくろうとしているんですが、長い間河川水域から子どもたちを遠ざけてきたということがあります。今、本当に大転換をしています。これは江戸川区の新左近川という川ですが、今遊びやすい環境をつくろうということでやっているんですね。こんな風にどんどんしどし遊べる環境をつくって今遊んでいただいています。で、遊んでいる時はライフジャケットと言うんですが、必ずちゃんとした装備をします。防災の時も低平地、0 メーター地帯では絶対をお願いしているのはライフジャケットなんですけれども、なかなか本格的なライフジャケットは持ってくれませんので、私は 100 円ショップライフジャケットというのをオススメしてですね。こういう百円ショップで買える洗濯ネットです。その中に発泡スチロールを八百屋さんか魚屋さんからもらってきて、これを切って中に入れて、100 円ショップのリュックサックに入れて、それでできれば長い紐があるやつを前抱えにして紐を背中側に縛ることでライフジャケットにして、これで避難していただきたい。0 メートル地帯をですね。こういう風にお勧めして「全部で 300 円です」。こう言ったらある人に言われちゃったんですよ。リュックサックに入れるなら洗濯ネット要らないから 200 円ですねと言われて、あ、そっかと思ったんですけど、ライフジャケットを 200 円で作れるってことで、ぜひ手作りで…これは遊ぶ時じゃないですよ。遊ぶ時はこんなじゃ遊べないですね。避難する時にはこういうのを使ってください。避難する時は空気の入る浮き袋はやめてほしい。それから川に遊びに行つて、その時にこういうのがあるかどうか、こういうのも確認していただきたいなと思います。以上でございます。

岩本氏：

どうもありがとうございました。ライフジャケットがあったら救えた命もたくさんあっただろうという話が事前の打ち合わせではございましたが、それではラ

■パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」



ライフジャケットについて、更に田村先生にお話しいただきます。お願いいたします。

田村氏：

はい、土屋先生のお話しの、ライフジャケットを避難するときに使うことは水防面でも非常に有用ですね。そのライフジャケットのことを中心に、私が所属している水難学会で行った検証等についてお話しさせていただきます。

検証をした事故は宮城県のため池で起きたのですが、斜面が斜めになっていて、そこで魚を見ていた子どもが落ちてしまった。それを助けようとしてお父さんがライフジャケットなくパニックになって、でも子どもを助けようと思って、自分も水中に入る。水中に入って子どもを助けたんですけども、さあこれから斜面を登ろうと。そんな傾斜はきつくないんです。けれどもそこはコケがたくさん生えていて、なかなか上がれない。そこで一緒に水没して亡くなってしまったということの検証をやったんですけども、その時もライフジャケットを着てさえいれば、水没することはないわけですね。そういう意味で、やはり原則、結論的に言ったら、水辺に近づく時に、水の活動をする時には、ライフジャケットを着るような日本にしようということですけども、それに向けてどう進むべきか、これからRACも考えていく必要があるのかなと感じております。

RACのホームページからですが、子どもの素晴らしい笑顔、川ガキになって川の流れて流れたり、そし

て泳いだり。こういう体験活動をする中で、川の流れを体で感じたり、または川の香りを嗅いだり、川を吹く風を川面の上で感じる、その様な体験をすることによって、それが水に対しての親しみとか怖さを無くしたりだとか、またいざ水害が起きたとき、ふいにライフジャケットなしで落ちてしまった時もパニックにならない。その時にやるのが私たち水難学会は背浮きというのを普及しているんですけども、でも背浮きもなかなか皆できるわけでもないの、やはり常にライフジャケットを着て水の活動をして水を本当に堪能しようというようなことを、この会から発信していけば良いかなと思います。

楽しい水辺活動をする時には必ず安全に行おうと。やはり安全が担保されていないと川の場合はそのまま溺れてしまって命を失うことに繋がるので、楽しい川遊びをするために、川から得るものをたくさんの子どもたちに享受してもらうために、やはり安全のことについて考え、そして基本としてライフジャケットを着ようということだと思います。

これは毎年6月に出る前年度の水難統計で、警察庁から出ます。平成25年で止まっていますが、それ以外もあります。これは上が発生件数、下が死者行方者数ですけども、死者行方者数が平成元年は1500人いたんですけど、どんどんどんどん海と川、湖全ての自然水域が入ってますが、大体今現在700名ぐらいですね。今年6月に出た平成3年分では744名と大体700名前後、平成元年に比べ半分に減ってはいるんですね。これは特にレジャーの多様化で、海水浴客が減ったというようなことがメインじゃないかなと思うんですが、年間700名の方が亡くなっているという事実。これは本当に何とかできるだろうという感じがします。では何で700人も亡くなっているのかと思えば、いろいろな川の事故、海の事故が夏にニュースで報道されますが、そこでははっきり言っていませんけれど、状況を見るとやはり皆さんライフジャケットを着ていないで、川や海で遊んでいるから深みに入ってしまって溺れてしまうということだと思います。昨年平成3年で見ると、先ほど言いましたように、744名の方が1年間通して亡くなった。中学生以下小中学生で

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」



31 名です。どこで事故が起きたかという、全体では河川が 34 % で海が 49 % と半分ぐらい海なんです。しかし子どもだけで見てみると、河川がもう 60 % ぐらい、6 割が河川だということです。子どもたちは身近な水域で遊ぶということで、私自身も群馬に住んでおりますけれども、海無し県です。海無し県ですけど、どこでも近くには川がある。群馬で言えば利根川の支流のいろいろな川があります。ここで遊ぶ。その中でライフジャケットを着ないで、事故が起こる確率も高いということで、ここ 10 年のうちに群馬でも利根川で一人利根川の支流の川でも一人。やはりライフジャケットを着ないで夏に遊んでいて、深みに嵌ってまたは流されてしまって亡くなったお子さんがいました。そういうことで、河川での亡くなる人は子どもが非常に多いということも知っておいてください。次に 9 月に警察庁で発表された夏の 7・8 月 2 か月間の水難概況ですけれども、今年も 228 名の方が亡くなってうち中学生以下が 9 名です。海の方で 113 名、河川の 88 名、こんなにたくさんの方が 2 か月で命を落としているわけですね。そういうことも、やはり何とかしなければいけないかなと思います。

そんな中で、日本だけではなく世界でも溺水で亡くなる方が多くてですね、昨年の 7 月 25 日に WHO、世界保健機関が世界溺水防止デーという日を決めて、多くの国で溺水予防のためにどうしたらいいか、ということを考えて始めています。それを具体的にどうしていくのかということですけど、ライフジャケットだけではなく、水泳の授業の中で水辺の安全のトレーニング

グをやるべきだということも指摘されています。アメリカ疾病予防管理センターのデータでいくとライフジャケットは、ボートや遊泳では必ず必要であるということです。あと日本の海上保安庁に当たる US コーストガードの 2019 年のレポートでは、ボートですが 613 件の死亡事故のうち 8 割、79 % が溺水関連で、その 86 % がジャケット未着用というデータもあり、日本もこれに同じじゃないかなと思います。ライフジャケットを着ないで水辺の活動をして、溺水するというケースが非常に高いということです。だから起こるべくして起こっているような溺水、溺死が起きているのかなということも言えるのではないかなと思います。

これは平成 30 年 31 年に東京都の生活文化局が作成した子ども用ライフジャケットの安全な使用に関するデータですが、ここで見てみると、海関係のいろいろなスポーツですとか、ボートやシュノーケリングなどは割とライフジャケットを着ている人が多いんですけども、川は内水面、湖・沼を含めてライフジャケットを着ないで水遊びする人が多いということです。だからこそ RAC は川がメインの活動団体ですので、今も行っていますがどんどんライフジャケットの普及を進めていく、またはライフジャケットの使い方・着方、浮き方などの教育プログラムを作成する必要もあるのかなという感じがします。

これは見たことがあるかもしれませんが、ライフジャケットの効果、有効性生存率ですね。海上保安庁のデータですけども、ライフジャケットを着ている場合は生存が 60 %。しかしライフジャケット未着用は生存が 30 % 弱ということで、7 割以上の方が亡くなっているということです。ライフジャケット着用時に 40 % が亡くなっているのは、なかなか救助されなくて、浮いているけれど低体温で亡くなってしまった。今回 4 月下旬に知床で悲しい事故がありました。あれは水温が 5 度ぐらいで、もうあっという間に低体温症になってしまったことが原因かなと思います。

ここからは河川財団の資料を参考にさせていただきましたが、非常にいろいろ資料に書いてあります。ライフジャケットで生死を分けた事例が出ていますので見ておいてください。それで水辺で、どんな時に事故

■パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

が起きるかという、やはり一番多いのは滑るとか流される、足を掬われるとか、あとは転落ですね。この様な場合でもライフジャケットを着てないと溺死に繋がるんですけど、着ていればある程度は浮いていられますので必要かと思います。水の中で息ができないですね、溺死が水難事故の大きな原因だと。先ほどもRACの大井さんの資料でも出ていたんですけども、人間の体って空気を吸うと2%、水の比重1に対して軽いんですよ。1 - 0.98 = 0.02です。これはどういうことかという、体全体の2%が水面より上に上がるということで、一瞬だけ直立でも上がるわけですね。でも、このままいくと重力で引っ張られて溺れてしまうんですけども、では2%空気を吸った時に、これをこのような背浮きの姿勢でいくと、鼻と口の呼吸器官が水面から出ずずっとこれを維持できれば呼吸確保できて、これで救助が来るまで浮いていられるわけですよ。だから、私たちの水難学会はもう20年間、全国の消防隊員と連携しながら、背浮きを小学校でゲストティーチャーとなって指導しているんですけども、ただここに書いてありますように、なかなか背浮きは練習してもいざという時には厳しいので、手を出してしまう。そこは2%なので、余計に沈んでしまいます。だから、そういう時にはこのライフジャケットを着てさえすれば、顔の部分は水面から出て鼻と口が水面に出ることによって呼吸が確保できるという意味で、ライフジャケットは大事です。背浮きもとても重要で、いざという時にはライフジャケットがない時に背浮きによって助かった生還例も非常にたくさんあります。だけれどもやはりライフジャケットを着ることがこの様な理由から絶対大事だということを、これから学校でもやる必要があると思います。

こういう非常に楽しい葦の中を気持ち良く流れるためにも、ライフジャケットを着ることがとても大事です。水の中だけではなくて、水際に行くときもジャケットを着けましょうということです。ついつい何か魚がいるなと思っている時に行くと落ちてしまう場合もあります。だけれどもライフジャケットと着ていれば、命が助かるということです。

そんな中で10年に一度、文科省は学習指導要領の

改訂があります。それで2020年に小学校高学年で今までクロール平泳ぎだけだったんですけども、初めて安全確保につながる運動ということで、背浮きというのがここで出ました。ただ指導要領で出たんですが、コロナで一昨年、去年とほとんどの全国の小学校ではプールがなかったということで、本格的にはこれから先生方も背浮きというのがあるのかということでやり始めるのかなと思うんですけども、水難学会でも先生方に背浮きのやり方を教えるようにしようか、伝講習会をしようかと考えていますが、それだけではなくライフジャケットのことも少し考え始めています。そうこうしましたら今年度なんです、文科省の中にあるスポーツ庁が、体育活動中の事故防止ということで、水泳授業における自己保全のための学習安全にかかわる運動に関連して「着衣泳・ライフジャケットの活用」ということで、これからライフジャケット教育に非常に重きを置いていこうということになってきています。去年、群馬の伊勢崎の小学校で背浮きのプログラムを半分でやって、半分でライフジャケットを着て足を真ん中にしてフラワーという形を描いたり、とこのような形で導入プログラムをやりました。

ちょうど2年前ですね。2020年の11月19日に、瀬戸内海で修学旅行の6年生が乗った観光船が座礁して沈没してしまった。その時に、沈没する前に全員にライフジャケットを着させて飛び込ませ、運よく救助船が来て助かったのですが、その時もライフジャケットを着ていたこと、それが非常に功を奏したということです。ここにも書いてありますけれど、救助された要因として、全員がライフジャケットを着ていた。後は着衣泳の講習を受けたり、カヌーの授業を夏前にやっていたライフジャケットの着方をみんなそれなりに知ってたらしいんですよ。そういういろいろなことが、天候にも恵まれたこともありますが、やはりライフジャケットというのが大きかったんじゃないかなと思います。

これは海洋大の船が沈没した時のライフジャケットのプログラムです。低体温症予防のためにHELP姿勢（Heat Escape Lessening Posture：体熱放散減少姿勢）というんですが、肘とか脇とか関節を曲

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

げるんですね。そうすると関節の後ろには血管がたくさんあるので、熱が外に出てしまうのを防ぐので、こういうような姿勢も海難の時にはやるようにという指導をしています。その後背浮きになったらエレメンタリーバックストロークというんですけれども、背浮きの状態で手と足を曲げ伸ばしして移動すると、非常に負担もなく泳げるので、こういうのもライフジャケットを着た状態でやるのがプログラムを入れたらどうかかなと思ってます。

先ほどのスポーツ庁の予算で今日も葛西でやっているライフセービング協会の方で、成城学園中学と、慶応大の慶応の幼稚舎、あと一つは香川県の教育委員会の予算が入っていて、香川県の教育委員会も海上保安庁と一緒にライフジャケットを着たプログラムを小学校にこの夏やったんですけれども、そこで大事なのはライフジャケットのプログラムをやるにしても、ライフジャケット自体がなければいけないということで、その行政とか地域の企業の方から、500着ライフジャケットの寄付をしてもらって、無料レンタルセンターを教育委員会の中に作る。そこで借りたい学校だとか、あとは個人で海や川に行くときにそこから貸してあげる。そういうシステムを作り始めて、それが他の県にも広がっていけば、ライフジャケット教育に必要な環境を各県に揃えられる。無料レンタルセンターを作るということもとても新しい方法かなと。その中で機会があれば、ライフジャケットを各家庭で買っていくと、それが水害の時、急に津波だとか洪水が来た時に、先ほどの土屋先生のお話と繋がりますけれども、垂直避難といってもなかなか避難できない高齢者もいるわけですね、老人ホームの方々も。そういう方もライフジャケットを着てさえいれば、浮いていて助かる確率も高くなると思うので、子どもたちだけではなくて、水辺の安全だけではなくて、水害の対策にもライフジャケットは繋がるかと思っています。

以上です。

岩本氏：

ありがとうございました。ライフジャケットですが、私の友人には子どもが産まれた家庭に出産祝いとして贈る人も出てきている位、すごく一般化してきていて



良かったなと思うところです。

では続きましてはちょっと趣向を変えまして、「東京の川のある風景～川瀬巴水の浮世絵に学ぶ」ということで、鈴木昇様にお話を伺いたと思います。

鈴木氏：

皆さんこんにちは。巴水のことを話すと、私も2、3時間じゃ済まなくなっちゃうので、ここでは私どものホームページを見てください。会社名はニフティーと言いますが、店名はギャラリーヌーベルと言いますので、ネットで検索すると出てきます。その中に巴水のことをいっぱい書いてあるので、そこを見てください。それと現物を見たい方は後ろの方に10数点持ってきていますので、それを見てください。数えさせていただいたんですが、約100名いらっしゃいます。この中で、川瀬巴水っていうのを聞いたことがある方、知っている方は手を挙げていただけますか？12、3名いらっしゃいますね。これはすごい嬉しいことで、実は私がやり始めた20年前ぐらいには1000人に1人ぐらいです。きっとそういう方は、最近のマスコミやテレビ、新聞や本でもって川瀬巴水を知ったと思うんですけれども、その中で出てくる新版画という言葉。これは新版画運動という、100年くらい前に、絵師が35名ぐらいいた団体というか運動ですね。この新版画というのは、江戸時代の浮世絵に対しての新版画です。1867年にパリ万博がありましたが、ジャポニズムという言葉は皆さんよく知っていると思います。当時のパリ万博の目玉は、日本は陶器、焼き物な

■パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

んですね。それで、その餡子として作られた浮世絵が輸出された箱の中にいっぱいあったと。当時はお風呂や御飯の焚き付けに浮世絵を使ってたそうですから、それだけ版元がいっぱいあったということですね。それにヨーロッパの人たちが影響を受けて、浮世絵を勉強しようという流れが起きたんですけど、当時はもう第1次世界大戦が始まる頃だし、いろいろなことがあって、もう浮世絵は江戸で終わっているのだからと。それで渡邊庄三郎っていう人がそれなら作って売ればいいんじゃないかということで、浮世絵を作って、それが新版画ですね。だから、浮世絵での新版画っていうのは、輸出用に作られたものなんです。ですから外国では有名で、日本では知らないというのは当然のことなんですね。

私が15年前ぐらいに川瀬巴水という人を知ったのですが、私は千葉県の柏という所から来ているんですけども、手賀沼という大きな沼がありまして、その沼の浄化運動を市民運動とやった時に、手賀沼に関する資料を全国から集めたんですね。その中に川瀬巴水の木版画、昭和5年のものがあったんです。その縁でもって「あ、この人面白いな」ということでうちの画廊で展覧会をやったら、川瀬文子さんという一人娘の方が新聞を見て観に来てくれて。そこで意気投合して川瀬巴水に大変興味を持ったと。それから今度はNHKに売り込んでこれをやれと言ったら、当然ながら門前払い。当たり前ですね。大放送局に知らないおっさんが一人来るわけですから、これは当たりのことです。それに挫けず何度もチャレンジしてやっと実現して、今回の巴水ブームを作ってきたというのが現状なんですね。

それで川瀬巴水っていう人はどんな人かという明治16年産まれ、昭和32年に74歳で亡くなって、もう65年ぐらい経ちますね。それでどんなことやった人なのかということですが、私が川瀬巴水に興味を持ったのは、彼は大田区に居住していたんですね。私も実はそこで育ったものですから、恐らく1キロ圏内に住んでいたの、幼少期の頃は同じ空気を吸っていたかもしれません。立会川という大田区と品川区の間に立会川というのがあって、その川でよく遊んでいた

んですね。ですから、どこかで巴水とすれ違ってるかなと。それと昭和54年に手賀沼の縁に越してからは、巴水の絵に出会って、ということで非常に縁がある方ですね。巴水はどんな方かっていうと、これは岩崎弥太郎、それから小弥太の別荘ですね。皆さん知っているかもしれませんが、岩崎弥太郎は当時、海外貿易で三菱財閥に財を成したので、その別荘に巴水を呼んで絵を描かせていたそうで、箱根の見南山荘とか清澄の別邸、その辺りのものが10数点絵になって残っています。海外ではポストカードとかグリーティングカードなどが習慣ですから、その様な物にも巴水はさんざん使われていたということで、海外では知られていたと。

それからこれは昭和7年に日本政府、旧鉄道省が「日本はもう刀や丁髷はやってませんよ」ということをPRするために、B全のポスター1万枚を1年間掛けて、当時まだ印刷技術が未熟ですから版画ですね。宮島の絵のポスターを1万枚作って海外にばらまいた。言わば観光立国の走りをやっていた。

これは実は昭和28年、戦後ですけども、日本政府が国賓の人たちにこの巴水の増上寺の絵と伊東深水の「髪」という題の木版画ですね。この2点をプレゼントしています。ホワイトハウスにもバッキンガム宮殿にもこの絵があるということは日本国民はほとんど知らない。それからこれは皆さんよく知っているスティーブ・ジョブズですね。彼はもう10代の時から巴水のことが大好きで、アップルで大儲けした後、いっぱい絵を買い出して、日本に来て買って行ったということで、スティーブ・ジョブズのことで結構皆さん知っている方が多いじゃないですかね。

これはユニセフのグリーティングカードに使われているもので、世界でも知られている。外国はクリスマスカードをいっぱい購入しますので。これはユニセフの一職員から広がっていった。ちょっと小さくて見えないんですけどね、これサンタさんが歩いているんです。雪の中を。こういうふうにかわいいもの多くて、非常に巴水というのは国際的に有利になっているということですね。

これは「清洲橋」ですね。昭和6年の作品ですけれ

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

ども、当時の清洲橋です。ここに船があつて、ご夫婦が漁に行つて帰る時、船の上で焚き火して帰るという非常に和やかな、本当に川を題材にした絵で、「川瀬巴水」というぐらいですからね。川と水が付いているんですから、川が大好きだった作家ですね。

これは「日本橋」ですね。恐らくあと 10 数年たつたら日本橋はこうなるんじゃないですか。巴水は非常にど近眼だったんですね。そのためにデッサンをちゃんとするので、この石組みなどもスケッチブックを見るとかなり丁寧に描いてありますね。これが昔の白木屋ですね。

これは「麻布二の橋の午後」ですね。こんなだったんですね。これは丸いんですけども、東京十二ヶ月というもので、今そんなに面影がないんですけども、ほんの 100 年前にまだこんな景色が東京にはいっぱいあったということですね。

これはすぐそこですね。御茶ノ水です。大正 15 年の御茶ノ水の、皆さんもよく橋の上を歩いていると思いますけれども、これが当時の御茶ノ水の絵ですね。雪が降っている、という風なもので、非常に今と比べると面白いなと。川瀬巴水という人は生きていた間に、35 歳から 74 歳まで約 40 年間、日本中を旅して絵にした人なんですけど、800 点ぐらい作っている版画の約 7 割が雨・雪・夜なんですね。ですからそこが面白いところで、あまり普通の人がテーマにしないところを、彼は描いて有名になっていた。ということで、巴水の絵を買うんだったら、ぜひ雨・雪・夜を求めいただければと思います。それで今、巴水のブームが来ております。第何波か分からないんですけども、これから来年はまだまだ巴水のものは脚光を浴びていくと思いますね。そんなことで、あとは後の現物を見ていただいて、あとはギャラリーヌーベルというので検索していただいて見ていただければと思います。ありがとうございました。

岩本氏：

どうもありがとうございました。いや、すごく魅力的なお話でございました。川にやっぱり親しんでいた作家さんだったということでしょうね。因みに後ろに飾ってあった版画は後摺りと言われるもので、版木自

体は残っているんですね？

鈴木氏：

関東大震災と、それから第 2 次世界大戦で大半が燃えてますね。今残っているもので、70 数点、約 80 点ぐらいは版木として版元に残っています。だからほとんどが無いということです。初摺りというのはもう桁が違います。後摺りというのは残っている版木で摺ったもの。それに対して初摺りっていうのは当時巴水が生きていた時に摺られたものを初摺りと言います。

岩本氏：

素晴らしいものを拝見させていただきありがとうございます。それでは「水都東京の舟運・歴史・観光」について、是非この方にお話しさせていただきたいと思います。法政大学名誉教授の陣内秀信先生です。どうぞよろしくお願いいたします。

陣内氏：

はい、僕も長く生きてくるとですね、随分東京の水辺でウォッチングしてきたということをつくづく思うんですけれども、1980 年に開始したんですね。小澤尚さんって芸大出身で宮城大学で教えていた建築家が本当に水辺が大好きで、彼が明石町出身なんですね。その彼に誘われて、佃島の「折本」という舟宿の老舗があるんですけど、その普通の釣り船で、本来東京湾の方に行くやつを、東京の真ん中の方をぐるぐる回ろうということで一緒に乗ったんですよ。それで病みつきになりました。これが最初に回った時の実に重要な写真なんですけど、もちろんこの旧・帝国製麻ビルがありますね。巴水の描いた日本橋。この方が喜多川周之さんという方で、神田つ子で郷土史家として知られている人なんです。彼の絵葉書のコレクションは、江戸東京博物館にも寄贈されています。彼がずっと語ってくれたんですよ。思い出と自分で調べた事実を。これが本当に楽しくて、東京の水辺って面白いなと懇談会で感じたんですね。その頃は本当にいろいろ残っていました。これは深川ですね。門前仲町の芸者さんがいっぱいいた所ですね。ここにプロムナードができる前、このように防潮堤はもうできていますけれども、佃島の町会長さんと親しくしていたんですけど、彼は若い頃ここに仲間と船で乗り付けて、この辺りの待合と

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」



か料亭に行っていたという話なんですね。これも漁師町の名残なんじゃないかと思うような、河川改修の前は何か東南アジアみたいですよ。これまだ東京証券取引所があったんですよ。ところがある日突然こういうふうにお棺の中に入っちゃったみたいでショックを受けました。

屋形船の復活というのは1970年代の後半なんですね。これは柳橋の「小松屋」と、「割烹小安」という料亭の女将が意気投合して、復活させようということのできたんですって。当時20人乗りなんですよ。我々それを関知して、70年代の終わり頃に乗ってもらいました。本当に楽しいなあと思いました。その頃、隅田川とか東京の水質が少しずつ良くなってきたんですね。例えば古川の河口ですけれども、舟宿なんて何軒かあって屋形船すごいですよね。徐々に水が良くなり、そして水辺への関心を取り戻されていく。そういう中でいろんな試みが、船を使うというのもどんどん出てきたと。で、これは印象的なのは宮村忠さん。残念ながら9月にお亡くなりになられたということで本当に悲しいんですが、彼が70年代終わりか80年代だと思うんですけど、隅田川の水上で、船で水上大学というのをやっていて、僕も誘われて行きました。パイオニアですよ。これはちょっと後ですけども、隅田川の新大橋で行われた宮村ゼミの水辺のバーベキュー大会に参加したんですね。もちろん許可なんか取らないですけど（笑）、宮村先生がおやりになるなら誰も文句言えないと安心して参加したわ

けですが（笑）、これは楽しかったですよ。だからこういうのをもっともっとやれるような東京の水辺にできないかなといつも思うんです。そしてちゃんと年代がはっきりしていないので調べなきゃいけないのですが、うろ覚えでいきます、申し訳ないです。今日、深川の「江東区の水辺に親しむ会」の須永さんがいらしているからお聞きたいところですけども、江東区の水バスが運行しましたよね。僕は朝日新聞の記事で「深川を東京のベニスに」というタイトルだったと思うんですが、それにびっくりして。建築の世界で有名な「象設計集団」のバスの乗り場がシリーズできて、今も残っていますよね。ああいうの活用すべきではないかと思うんです。だけれどもそれが中断しちゃったわけですよ。これも須永さんに伺ったんですが、一回中断したんですけど、埼玉の船会社の方がそれを再開したんですが、それも長続きしなかった。これは確か、ロックゲートの開閉操作を河川事務所職員の都合で土日はやらないので、乗降客を確保できず廃止になってしまったそうです。ちょっとそういうことを考えながら、もっとダイナミックに運営していかなきゃいけないと思います。神田川・日本橋川・隅田川、それからやがて芝浦とか品川とか、あるいは深川を回るようになっていったのですが、やはり最初はそういうルートがなかったんで、船頭さんとスタディーしながら恐る恐る入っていったところもあります。スクリーを壊したこともあります。そんな状態から始まって、だんだんだんだん船会社も増えてきて、水深も測れるようになってきたんだと思うんですけど、現代的な船で、これなんかハーバード大学の大学院の建築スクールの学生を建築家の伊東豊雄さんが受け入れて、頼まれてやったんですけど、みんな大喜びなんです。世界にこういう都心の渓谷美ってないんですね。東京のユニークなところだと思います。

これがこの時期が僕にとっては非常に印象深いんですけど、80年代前半というのは東京にウォーターフロントブームが来たわけです。一つはだんだんコンテナ化して、物流の基地が外へ出て行く。したがって、かつての古い、といっても近代の物流倉庫群が空っぽになってくる。そこを上手に生かして、いろいろなア

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」



クティビティーを入れる。それが 80 代前半のベイエリア、大川端、そして月島、芝浦辺りに展開していきます。これは有名な「インクスティック芝浦ファクトリー」でこれが「タンゴ」というレストランですね。ここはライブハウスです。奥に「ペニス」というワインバーができて、そこがこれを運航したんです。この船着場を既得権で使えたわけですね。これが重要だった。ここでの水上パーティー、僕も参加しました。こういう経験というのは本当に今も染み付いているんですが、なかなか現代でもないんですよ。もっとももっとこういうのを自由にできるルールを作る必要があると思います。

もう一つ僕らの試みで重要だったのは、銚子からずっと内川廻し航路のルートですね。江戸時代に東北の物資を運ぶのに、房総を回ると危険だし時間がかかるのでショートカットしていた。竹村先生のお話にあった利根川東遷ですね。それは水害から防止するのと同時に、舟運の大々的な展開に役に立ったわけですが、その一連の絡みがありまして、それを僕ら体験しようということで、勝どきマリーナから船を出して乗り継いだりタクシーに乗ってショートカットしたりしながら、何遍もロックゲートをくぐって行きました。面白いですよ、こういうことができるわけです。これはヨーロッパなんかは今でも残っていて、レジャーなんかにも大いに生かされている。そういう可能性もあるんですよ。

次はレディクリスタルですね。ここが天王洲アイル

ですね。ここはこんなふうには水辺、これは日本郵政なので既得権で船を使えると。フランス料理を食べながらクルーズできるというちょっと日本離れした格好良い、ベネチアにも無いようなレストランができて僕も気に入って何回も行きました。ところがもう今や、マンションです。せっかく良いのができているのに潰されちゃう。幸いこの船は対岸の天王洲アイルに接岸するようになった。

で、ここから E ボートが東京にも展開してくるんですね。まさに今日、何度も名前が出ていた田中栄治さん。田中栄治さんは全国で E ボートを展開なさっていて、すごく盛り上がっていたんですけども、東京ではやっていなかったんですね、東京では全くない。東京の都心を船で回るのを一緒にした後、田中さんすっかり東京も面白いねってことになって。それで東京でも E ボート大会をやろうということで、お台場が選ばれたんですね。学生が盛り上がったんですよ。だから東京の E ボートが本当にこの時期 90 年代 2000 年代ですかね、盛り上がりました。それで道の駅に次いで川の駅も作ろうとなってロゴを考えたり、これは全国に少しずつ広がっていると思いますけれども、そういうのを地域交流センターが中心になってやったと。本当僕らもいろいろな所へ行きました。これは日本橋の下をくぐっている。気持ちですよ、E ボートで日本橋の下をくぐるという。これは日本橋川ですね。こちらは小名木川です。

これは岩本さんのバージ船に乗っけてもらったんですね（笑）。ボートピープル（一般社団法人ボートピープル・アソシエーション）という、格好良いちょっとゲリラ的な、先端的な動きで、バージ船を改修して演劇もできる、バーにもなるというような。東京都が応援してくれたんですか？ 国交省？

岩本氏：

内閣府ですね。

陣内氏：

これを京浜運河の一角、大井競馬場の近くに停泊してたんですね。そこに我々ゼミでお世話になって。これは本当に楽しかった。だけど残念ながら継続しなかったそうですが、ゲリラ的な動きで、やはり制度と

■パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

か全体のまちづくりというのはそういう方向へ向いていないので、それを如何に壊すかということをしていろいろな方々がやってきて、僕らもそれに便乗していたわけですね。

これは電気ボートが広まった時期がありまして、この間も亀島川のイベントで電気ボートでずっと回りました。旧中川は良くなりましたよね。本当にびっくりするぐらいに良いなと思いました。それから水上タクシーには、いろいろな船会社がどんどんどんどんこの東京の都心を回るとか、気運をつくっている。これは東京都観光汽船の社長さんが頑張っているという水上タクシーをつくらせたんですよね、三重県のどこかで。これがイギリスのウィリアム皇太子が来訪の際に羽田から浜離宮までこれで案内したという。本当にそういうことがステップとして生まれているんで、もっと大々的に何とかならないかと。

これはEボート大会で、僕もまだエネルギーはあったので、何回もチャレンジしました。楽しいんですよね。それから、三井不動産が芝浦アイランドの大規模な開発をした時に、すごく交渉を頑張ったここに船着き場ができたんですね。これもお台場とかららぼーとに行く定期便として今もあるんですけどね。

これは水陸両用バス。これは実は江東区に舟運が大好きな行政マンがいらっちゃって、彼が深川の周辺のいろいろなことをやってくれたんですけども、その後、日の丸自動車に引き抜かれちゃって行政をやめちゃったのが残念だったんですけど、これも試乗会に行きました。

これからももっともっと東京を盛り上げたいと、ミズベリングも全国でどんどん展開して、岩本さんもあっちこっちで大活躍ですが、東京はまだダメなんですけれども、これは留学時代に経験したことなんです、ベネチアでは7月下旬に花火大会があるんですね。ペストの終焉を祝って教会を建て、お祭りをする様になったのですが、みんな思い思いに船を仕立てていくんですね。これが楽しいんです。独特の食事とそれからワインを持ってみんな盛り上がるわけです。深夜まで続いて、11時過ぎに花火が打ち上がって終わってもみんな帰らないで若者はリド島という所まで行って

夜明けを待つと。本当に市民が大好きな祭りで船がたくさん出るんです。

それからこんな風に手漕ぎのボートで全員集まるといことで、今では世界中から集まるイベントになっている。こんなことが東京でできないかなと、東京は手漕ぎだけじゃ無理だろうからモーターが付いていて良いんですが。東京都がコロナになる前にこういう社会実験をしてくれたんですよね。僕も行きました。晴海から乗かって、日本橋のたもとの船着き場まで行くという。逆回りもありました。これは成功したと思うんですけど、その後のコロナ渦になっちゃって。今はベイエリアの埋立地にたくさんマンションができて人口が相当いるので、ちょっと工夫して行政もテコ入れして頑張れば本気になれば、岩本さんがこの舟運のことでいろいろ考え実践なさっていて、この間も議論をしましたが、世界中の都市はみんなそういう方向に向いているわけですね。ニューヨークもハンブルクもロンドンとかも。東京だけが取り残されているわけですよ。そういう意味でものすごく可能性があるんで楽しみ。舟運と歴史と観光と。観光の概念もいろいろ広げていく必要があるんだと思います。それからこの間、東京水上タクシーの6人乗りのボートをチャーターして仲間と水上パーティーを楽しみました。そういう使い方もできるんですよね。ジールさんの20人ぐらい乗れるやつで、僕が退官する時に仲間がパーティーを水上でやってくれました。そういったいろいろなタイプの船や船会社がありますが、だけど定期便が欲しいですね、やっぱり。そんないろいろな思いでみんなと議論しているところです。どうもありがとうございました。

岩本氏：

ありがとうございました。

お話が盛り上がりまして、想像の通り持ち時間を皆さんそれぞれ超えてくれました（笑）といことでこれからパネルディスカッションに入っていきますが、皆さんにこのフリップを使って書いていただきたいことがあります。まずはですね、お話しになったものの中で全然構わないんですけど、「変化が見られたこと」。それまでの水辺とどんな変化が見られた

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

かというのを、それぞれのご関心のところで書いていただけますでしょうか。

その間に私は、皆さんからお話があった中で気になったところをポイントとして抽出していきたいなというふうに思っております。まず最初に土屋先生からは、水路がゴミ捨て場だった時代のお話がございました。洪水の話で土屋先生は川に本籍がある、ということもお伺いして面白いと思いました。井戸水の汲み上げ過ぎで地盤沈下が起きて、水防団消防団の活動のお話もありました。淀川の堤防の、震災が1月で最悪を免れたという話もありましたし、あの後本当に6ヶ月位で堤防が復旧したということで日本の土木技術の素晴らしさを見ることができたところでもあります。我々は普段、土地がそもそも乾いていて、都市としてインフラが整っているという風に感じている部分がありますけど、実はポンプが常に動かされていて水が排水されているから乾いた土地になっている場所であるということを認識しなきゃいけない。そういう場所も東京の東部の低地にはあるよね、という話がありました。100円ライフジャケットの話もありました。土屋先生と私は多分年が1回以上離れていると思いますが、先生が過ごされて来た時代と私の時代とは、当たり前前と思っている着地点が全然違うんだなということを改めて感じた次第ですね。

田村先生のお話の中では「ういてまで」というのが最近よく言われていまして、私の子どもなんかは幼稚園でも保育園でも「ういてまで」を学んできたんだみたいな話があって、田村先生の様な活動、それから皆さんの活動が本当に社会に浸透してきたことを感じるのですが、それでもまだ川の着用率が低いとか、最近私がやっているSUPでも、出て行って帰って来れなくなったという事故が最近報道にたくさん出ていますが、そこでもライフジャケット着用率がその後の救難救助に大きな差を分けているというのもありまして、やはりライフジャケットの着用についての啓蒙活動は本当に大切だなと。その中で特に注目したのは「発信をする」ということ、これは本当に大切なところなんじゃないかなと思いました。

鈴木さんのお話ではギャラリーヌーベルを是非ネッ



トで検索してぜひ見ていただければと思うんですけども、輸出するものとして新版画というものがあったが、スティーブ・ジョブズの注目などを経て、鈴木さんの活動を経て、今まさにまたブームになりつつあるというのは、一つはその皆さんの活動が素晴らしかったということは勿論、川に対する皆さんの関心も復活してきたりとか、観光に対する考え方とかも日本の中で少し変わってきたというところが大きく影響しているんじゃないかということもあったので、是非今のうちに皆さん買っておかれたらと思います（笑）。

陣内先生は、僕が水辺に関わる以前の時代を教えてくださいまして、これは録音・録画しているでしょうから、アーカイブとして、過去どんなことが東京の水辺で起きていたのかということ振り返っていただく時の資料としても使っていただければ良いかなというふう思うんですけども、その当時の既得権やゲリラという言葉が2、3回ずつ繰り返されておりましたけれども、そうじゃなくて合法的にどう着地させるのかということが、今ようやく議論ができる様になってきたんだなと。そんな話もしていければと思います。

それではそれぞれのパネリストからどんなキーワードが出てくるのか、ポイントを紹介していただきます。まず土屋先生からお願いいたします。

土屋氏：

一番印象に残るのは河川がオープン化されたこと。今まで僕の印象としては閉鎖空間だった時代があまりにも長いんですけども、ここまで開かれたエリアに

■パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

なっているんで、どんどん使っていきたい。もう一つ、もう一歩進めたいのは、さっき「らくらく通勤」というのがありました。確か今でも、目黒川でやっているんですよ。朝7時半に、昨日も見たんです。もう寒そうな雰囲気でしたけど。

岩本氏：

オープンデッキでしたか？

土屋氏：

オープンデッキ。ちょっと社会実験を通じてなんですけど。実は私が一時勤務した江戸川区では、小岩の菖蒲園という所からベネチア号というボートを出して、ずっと長い間運営していたんです。竹芝桟橋まで。赤字が溜まって中止になってしまったんですが、やはり通勤とか日常性を持った定期運行が何とか赤字を解消してくれるんじゃないかなと思うので、これは期待したいなと思います。

岩本氏：

はいありがとうございます。では続きまして、田村先生お願いします。

田村氏：

川辺の素敵な遊歩道が随分増えてきたなと感じています。海洋大は水辺の近くにあって、2つのキャンパスの越中島と品川ですが、両方とも運河に恵まれていて、そこに遊歩道が整備されて。整備されるとそこでジョギングする人や散歩をする人も増えてきて、水辺に接近する機会を作る形になっていくので、非常に理想的な方向にいったん感じています。

岩本氏：

ありがとうございます。ファームの素敵な遊歩道の整備に関わることですが、土屋先生いかがですか？

土屋氏：

いや本当に今、隅田川のデッキもあちこち増えてきましたが、本当にありがたい感じで。隅田川のデッキが造られたとき、はっきり言ってブルーテント村と言われてしまったんですね。ブルーシートのテント、いわゆるホームレスの方がずっと退かないものですから、定期清掃をするという日は退いてくれという約束を作って退いてもらう。退いてもらう時に「じゃあちょっと取り敢えずこっち行って」ということで23

区共同のシェルターを作ったんですね。500人ぐらい収容できるシェルターを造りました。シェルターといっても、簡易宿泊所よりもうちょっとグレードが高くて、給食もあり保健施設も用意してということで、だんだんだんだん社会復帰をしていただくというのも、デッキを作って、ようやく都内の公園に沢山の方々が、デッキに皆さん集まることになって、いわゆるコミュニケーションが取れるようになったんです。

岩本氏：

より包括的な取り組みとして河川がきっかけになったということですね。

土屋氏：

だから素晴らしいきっかけを与えてくれたのがデッキかなと思います。

岩本氏：

それでは、鈴木さんどうぞよろしくお願いします。

鈴木氏：

私は大きく分けて2つちょっと贅沢に描かせていただいたのですが、これは創造・創作ということなんですけども、例えば創造することが非常に大事である。要するに、例えば「今自分らの生活の一部になっている前の川が氾濫したらどうなるんだろうか」ということを想像する。避難場所に逃げても人・人・人であろうからね。ともかく命を守らなきゃいけない。それは具体的にどうしたらいいんだということを、今パネラーの皆さんも話されたように、自分の実体験として想像してみるということが大切になるのかということになります。

それから川瀬巴水の絵もですね、ただ綺麗な絵を描いていただけでは、ここまで来ていません。彼の絵の中には、創造・創作がかなり入っています。ですから、絵をよく見ると、実際とは若干違うところがあったり、人が入ったり入っていなかったりというのは、絵の中で創作する、見る人が自分がここにいたらとか、自分の故郷を思い出すとかですね、作品を見た時に何か想像させる。スティーブ・ジョブズという人は、審美眼があったので、そういう点を非常に見抜いていたんじゃないかということがありますね。ですから巴水は絵を描く時に、絵葉書みたいに綺麗な場所は避けてい

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

るんですね。一般の人が自分の目の前にある川の風景であるとか、誰も絵にしないようなものを絵にしている。それが非常に素晴らしいなと言えます。

もう一つ「利根運河の再生」って書いたんですが、実は私どもの地元、柏市と野田市・流山市の間に、約 9 キロの利根川と江戸川を結んでいる、幅 100m 以上の利根運河というのがあります。これは約 140 年前、オランダのムルデルという人が手掘りで掘ったんです。もう戦争が始まる頃で、電車と車の社会になって舟運がなくなるということで、活用されなくなった。今も実際にあるんですけど、この運河を私は再生したい。皆さんが話しされている様な、川が活かされるんですね。実は地元の 3 首長と話をしているんですけども、手賀沼の再生イコール川の再生がどういうことかという、手賀沼から利根川に出て約 8 キロ 9 キロ上ると利根運河に行きます。そこから江戸川に渡ると約 9 キロ。江戸川から東京湾のディズニーランドまで行くと。この約 20 数キロの船旅が楽しめるようになる。これが一番大きな目的ですが、非常時に電車や車は動かなくなりますね。やはり船なんでですね。物資を運ぶ、怪我人をどうする、と言った時に「船」なんですね。ですから、今からそういうことを想像して着手する。転ばぬ先の杖ですね。そういう形でぜひこの利根運河を地元としては再生したい。これが再生できたとなると、観光としても非常に役に立ちます。非常時には命の川になる。非常時のその前に、自分の命を守るということを一人一人が少しでも意識する・想像するということが大切じゃないかなということを書かせていただきました。

岩本氏：

どうもありがとうございます。利根運河は明治時代に投資家を集めて民間資金で作られたというのがありますから、皆さんに資本がありましたらぜひ投下していただいて（笑）、利根運河再生にも投じていただければと思います。それでは陣内先生お願いします。

陣内氏：

新しく最近評価されているポイントだった様な気がするのですが、沢山書いちゃったんですけど、さっき田村先生が水辺の遊歩道が良くなってきたというお話が

あったけど、犬の散歩道としてすごく人気があるんですよ。杉並区の阿佐ヶ谷にある善福寺川は本当に犬の散歩が多い。それと隅田川もすごい。これは外国もそうですね。ニューヨークもハドソン川とか。ドックランもあったりして。それはコミュニティを作ることになるんですよ。日本人はシャイだから、人間だけが歩いているのではなかなか人とお話しないけれど、犬好き同士の会話で皆仲良くなるんですよ。だから人と人が繋がる。それからもう一つ、花見の名所が蘇ってきた。特に目黒川はちょっと前まではしょっちゅう氾濫するし、イメージがあんまり良くなかったんですよ、町工場ばかりだったので。ところが町工場がリノベーションされて格好良いお店になったり、東京都の治水事業が成果を挙げて、地下に大きな貯水槽を造ったりして水害もだいぶ減ってきて。イメージが良くなった。あそこは本当に花見がすごいですよね。海外から見れば、日本の街には広場がないとよく言われたけど、そういう広場的な皆が集まっているいろいろなことが起こる所っていうのは川沿いなんですね。河原とか橋の袂だとか。だから言ってみれば公共空間、 commons なんですよ。お金を出さなくても長く楽しく居られる。そういう非常に貴重な場所なので、これを大切にしない手はないなと。だけれどもちょっと足りないのは夜が寂しい。夜の水辺ってどうも上手くいっている所がありませんよね。もちろん道頓堀とかは別なんですけれども。夜が良いんですよ、水辺はね。特に夕暮れ時から夜景に変わる都市のそういう表情をもっと皆が楽しむ様な、そういう水辺の趣向、だから照明も実に重要なんですね。そういう感じです。

岩本氏：

どうもありがとうございます。花見に関しては、今日来てらっしゃる須永さんたちが一生懸命門前仲町の花見の会を催したりして、とても頑張ってきたのが今定着して、船に乗ることも当たり前ですけど、花見そのものもあそこのエリアで盛り上げて、川の活動をされてきた方々がそれをやってきたということを皆さんにも是非知っておいて頂きたいと思います。

いろいろと過去から変わってきて、今着目すべきポイントというのを沢山お聞かせさせていただいたと思

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」



いますが、こういうことを知っておくことというのも、僕らの世代からするとすごく大切なことかと思っています。それを伝えていったりとか、それから皆さんにもそれを踏まえて活動していただければいいかなと思うんですけども、そんな中で、はいどうぞ。

土屋氏：

陣内先生のお話と岩本さんのお話に触発されて、一つだけ皆さんにお伝えしたいんです。目黒川の桜は、実はある公務員のゲリラ的な活動で植えられたんです。実は目黒川の改修は堀込河道なんですけれども、河床浚渫だけでは足りなくて全部大きな掘削をして、大型のU字溝みたいな川にしました。その時に余りにも地域の方に迷惑を掛けたという先輩が、太さが親指くらいしかない桜の苗木を1本買ってきて、これを植えろって言うんですよ、我々に。許可なんか取っていません（笑）。当然河川費用を使えないので、もうゲリラ植栽です。だからもう植木のことは分かんない我々が勝手に植えたものですから、あそこはものすごく桜の植栽間隔が近いんですよ。でも、そうやって迷惑をかけた地域の人たちにいつかはってということで、実は玉川上水にそういう桜を植えた東京の先輩たちを見習って、私の先輩は植えちゃおうって言うので植えちゃいました。それは今、こんな風になっているんですね。

岩本氏：

鈴木さんはこの話を聞いて、その創作・創造性という話をコメントとして挙げられていましたが、どうお感じになりますか。

鈴木氏：

土屋さんの話とは少し違うかもしれませんが、今、私も想像していたのは、陣内さんの話で夜が寂しいと仰っていたでしょ？来る車の中でずっと考えていたんですけど、その過去の巴水の話ばかりじゃなくて、今、川と我々がどう繋がるのかというのを考えていたんです。これはちょっとド素人考えで皆さんに笑われるかも分からないんですけど、今は川っていうと護岸がもう壁ですよ。川と親しむと言ったって何やればいいの？ということですけど。私は江戸川の利根運河から柴又まで自転車よく走るんですね。ただ夜はやっぱり暗いんですよ。どこかに例えば水車とかを使って自家発電的にしたり、それを使って照明、夜でも明るくなる様に、その位の灯は小さい自家発電でも出来るんじゃないかと。それを例えば官民学一体になって、大学生や高校生にデザインを考えさせて、それを形にして、それにスポンサーを付けるんです、企業から。宣伝になるから。そうすると、そういう風車みたいなものが川の周りに幾つかあって、これは川の事故になった時に壊れない様に丈夫に作ると。そうすると夜の散歩が楽しめる。そういうものが幾つかあって、デザインのコンテストにする。そうすることによって川に皆さんが愛着を持つし、夜の散歩に出る。そうすると事件事故も減ると。そういうことが考えられるんじゃないかと。

岩本氏：

素晴らしい！是非是非、この話を実現させる為の法制度は、もう河川行政の方々も準備されていますから。河川敷占用許可準則の特例占用というのを使っただけだと、民間の人たちが発議して、民間の人たちがお金を集めてそれを設置するのももう許可できるような体制はできていますから。そうですね、豊口さん（笑）

鈴木氏：

ぜひこれを若い子どもたちに参加させて、絵を描かせてそれを形にする。

岩本氏：

実効性を高めていくというところがすごく重要な時

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

代に入ってきて、これは多分創作性や創造性が必要になってくると思うんですね。

鈴木氏：

そうそうそう。だからやはり遊びとか発想からそういうのが生まれるからそこからいろいろなものが生まれてくる。副産物が産まれると思うんですね。それをぜひ実現できれば、私が生きているうちに、形になれば楽しいなと、ちょっと想像しました。

岩本氏：

良いですね！それは多分、日常的に散歩道があるから、ということもあって、そこに触れ合いができたりだとか、想像する切っ掛けが生まれたりもする、田村さんはそういったことを申し上げたかったのではないかと思います。

田村氏：

そうですね。陣内先生や土屋先生が言われたように、冬の夜の遊歩道のライトアップで、実際に目黒川はもうそろそろですかね？冬の桜ってピンクのLEDを樹に巻いていて、すごく綺麗なんですよ。品川の方でジョギングの授業で「マラニック」、マラソンピクニックというのをやってるんですけども、その時間帯はまだライトアップしてないので、学生にはすごく素敵だから学校帰りにでも観に行くと良いと案内しているんですけども、さっき言ったように、スポンサーがそれぞれの樹の幹に広告を付けていますね。

あと一つは、陣内先生の写真にもあった寺田倉庫。寺田倉庫のふれあい橋、天王洲運河の所ですか。あそこのライトアップがすごく素敵なんですよ。で、あそこは特区になって水上ホテルも最近できて、その遊歩道が本当に綺麗にライトアップされていて帰りに通って帰るようになって話しているんですね。

岩本氏：

いや、もう素晴らしいです。運河ルネサンス制度という、東京都さんがやられている制度でございまして、それのお陰で先程の河川敷占用許可準則と同じように、民間の人たちが寄ってたかってやっていいよねということを港湾行政の人たちが受けとめてくださって、そういったことを許可して貰える様になったとい

うことであります。はい、どうぞ。

鈴木氏：

今は普通、子どもたちには危ないから川に近付くなくとよくいいますよね。この全く逆を返せば我々がキの頃は川で遊んでましたよね、いっぱい。そういうことのリスクを考えて、それをどうやったらクリアできるのかということを考えるのが知恵ですよ。ですから、やはりこれからそうしていくことによって、そこには危険もあるんだよということを学習させていく教育ですね。これはすごい大事だと。

岩本氏：

そこはもう RAC ですね。体験活動を啓蒙する、教育していく機会を作っていくということ、これがもうとっても必要な時代に入っているということですね。

鈴木氏：

そうですね、行き着くところへ行くと、その教育であるとか、環境問題。強いて言うと政治問題が入ってということになりますからね。そういうことはやはり我々が想像しながら、どうやったら今より良い社会が作れるのか、やりたいことと出来ることをきちっと分けて、今我々に何ができるのかということ想像する、実行するというのが非常に大事ですよ。

岩本氏：

陣内先生が隣で聞いていてうずうずしているのではないかと思います。

陣内氏：

川沿いに素敵なプロムナードができたり、新しい現代の価値が加わったわけですよ。元々歴史的に辿ると、川ってものすごくいっぱい重要な役割を持っていたんですね。まず舟運、それから産業を育てる、そして染め物とか、いろいろなものが川と結びついて。それからレストランも空調のない時代には料亭なんかみんな水辺であったわけですよ。だから水というのがものすごく多様な価値を持っていた。それが明治になりだんだんだんだん剥ぎ取られていって、最終的にはもう汚い、汚れちゃって近付くのも嫌がられる。それと徐々に人間の手から離れていくと、今度は逆に近代化で水害も増えたわけです。そうすると治水を徹底

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

的にやらなきゃいけない、ということで河川の行政の方々がしっかり治水で守ったけれど、逆に市民は離れてしまった。それがそうじゃなくて、今日のお話の中で竹村先生が仰ってくださったように河川法が変わり、どんどん新しい考え方が入ってきた時に、ミズベリングもものすごくいっぱい使っているんだけどもっと本格的に現代の川が持つ新しい役割、機能、目的というのをまた作り出さなきゃいけない。欧米はそれをもっとやっていますよね。水辺に新しい価値を、そこにこそ何か格好いい再開発の場所がどんどん生まれているわけですね。倉庫だった場所が現代アートのギャラリーになったり、格好良いレストランになったり、ファッションを生み出す場になったり。そういうことがもう世界中で起こっているわけですよ。

岩本氏：

イノベーションの場所になってますよね。

陣内氏：

そう、イノベーションの場所になっているんですよ。ところが日本はどうもそういう感じの戦略がないんですね。だからミズベリングとか RAC の活動がものすごく重要で、川がこんなに生き活きと使いこなせるんだよ、新しい時代だよと。それを産業経済構造を変えていくというか、都市づくりの根幹を変えていくパワーにまで持っていくのが、本当は重要なんじゃないか、と思っているんですよ。舟運は中でもとりわけ重要なものの一つですね。それから地域でルールを作り、水辺も新しい形で占用をして利益も上げられる、こういうスタイルができてきているわけだから、もう本当に追い風になっているわけで、ただ発想がまだ、それこそ創造力っていうか、水辺をどういう風にこれからの時代に使っていくか。かつてはまた別の意味ですごく多目的に使ったけど、今の時代でどういう新しい目的、役割が付加できるかということ議論しなければいけないんじゃないかと。

岩本氏：

今、この会場の後方に学生さんたちがいっぱいいらっちゃって、そういう人たちの若い発想とかが今まさに必要とされているんじゃないかと思うんですけど、ぜひ皆さんに新しい活動家の種の人たちにエール

をというか、こういう風に東京が今、ここまでやっているんだ、頑張っているんだぞと、ちょっと一人ずつお話いただけたらいいかなと。じゃあまず土屋先生からお願いします。

土屋氏：

いやもうまさにフリーに使える空間だということから、若い人には一歩踏み出していただきたいですね。僕らの頃はさっき見ていただいたけど、汚いとか使っちゃいけないとかのところからなんとか使えるようにしようと言ってきたんですが、もうそういう時代が終わり。あんなのはもう昔の話にさせていただいて、自由に使えるってことが、岩本さんが今言った様に河川法の 23 条の準則の改正からもう本当に全部フリーですから。ちょっと手続きはいりますけれども、もう自由な発想こそが将来の河川をつくるんだと。そのときにやはり陣内先生がたくさん言っているんですけども、外国を見てください。インターネットで見ればいくらでも出ます。アムステルダム、ベニスもそうです。ハンブルグもそうだし、もう先進事例がたくさんあるんですよ。あれはあそこまではできるということです、日本だって。ぜひよろしくお願いします。

岩本氏：

あそこまでだったらできますよ！というお話でした。では田村先生お願いします。

田村氏：

はい、学生さんでこういう会に参加してくださる方は非常にアクティブだと思うので、明日 4 コースのエクスカージョンもありますよね。川のいろいろな活動、そういったのにも参加してガイドをやったり、船に乗って案内する。積極的にそういうコーディネートをしたり、リードしてもらったりすると、やはり若い人たちの力というのは、どんどんどんどん繋がっていくと思うので。先輩がやれば後輩もやる、法政大学の陣内先生のグループでは代々引き継いだということもありますし、そういった感じで都内には多くの大学があるので、横の交流もしながら牽引役として現場で是非やってもらいたいなと思うんですよ。それとジョギングの授業でいうと防災船着場が最近整備されて、昨日は目黒川の河口の東品川海上公園に行ったら、遊

■ パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

歩道も整備されたと同時に素敵な防災船着場ができていますけれど、いつも鍵が掛かっているんですよね。あれがいざ地震が来て水上交通を使って代替輸送するような時に、その時に使えるようにするには普段から使っていないといけな。そこをEポートをやるとかカヌーをやるとか、舟艇の基地として水辺のレクリエーションをそういう場所でやる、ずっと前から防災船着場はあるけどそういうプログラムは全く動いていないので、行政と民間と、そこに若い力を入れてできるところから実際にレクリエーションの場として素晴らしい防災船着場を使っていけば、いざという時のためにシミュレーションをして、もし地震がきて陸上交通がストップしたらどうしたら良いんだろうかと、そういうことも考えながらやるのが、やりながらレクリエーションを楽しむということだと防災にも繋がるかなと思うので、それを提案したいと思います。

岩本氏：

ありがとうございます。船着場は開放されてきているんですけれども、それを開放するためにはお金が必要だったりするんですが、それを地元の人たちが自治活動の一環としてやればお金はかからないというところで、自治活動の延長にどんどん繋がっていきけるような、楽しみながらの自治活動に繋がっていくと良いんじゃないかと。実は隣にいらっしゃる土屋先生は東品川海上公園の整備に関わっていらしたということです。では鈴木さんお願いします。

鈴木氏：

これは岩本さんや代表理事の宮尾さんをお願いというが無茶振りするとですね、2022 東京宣言みたいなものを考えて、RAC の旗印にするのは大事ですよ。

キャッチコピーとして、長ったらしくなく、短く「2022 RAC 東京宣言」みたいなキャッチコピーを打ち上げるっていうのは、若い人がそのほうが分かりやすい。我々年配者がうだうだと長ったらしく話しても2、3日寝たら忘れちゃうんですから。なので短くまとめたものを考えることも大切なんじゃないかと思っています。

岩本氏：

ありがとうございました。では陣内先生お願いします。

陣内氏：

東京は世界の他の水の都市に比べても、多様な水辺があるんですよね。山の手にもあるし皇居にもあるし、本当に多彩なんですよ。湧水もある。でも近代の発想で蔑ろにされてきた。関係も薄くなっちゃった。でも今また再発見して、取り戻すチャンスなんですよ。その時に空間の発見が重要だと思うんですね。僕は外堀が死んでたのに着目して、飯田橋のカナルカフェと組んで水上コンサートを11年間やったんですね。僕が大学リタイアした後4年途切れていたんですけど、若い学生がまたやってくれたんです。そういう努力が必要。それからちょっと違うんだけど、僕は阿佐ヶ谷に住んでいるんですが、阿佐ヶ谷はジャズフェスティバルをやるんですよ。こないだもあって行ったんですが、パールセンターの分岐しているすずらん通りっていう小さな街路のポケットパークみたいな所をうまく見つけて、そこで演奏して。で周りを観客が取り巻いている、椅子も持ってね。だから人間の街路というか、既存の道路優先の時代から人間が街路を取り戻すと。これはまさに水辺にそれを適用できる筈ですよ。そういう発想で可能性を、先ほどのイメージネーション、想像力と繋がるんですけれど、空間をうまく使うという構想力、それと実施力、それが特に重要じゃないか、若い人にはできるんじゃないかと思います。

岩本氏：

どうもありがとうございました。素晴らしいお話を皆さんにお伺いしてきたわけですが、今日確認できたことは、東京はまだまだだということと言いがちだけど、意外とオープン化ができていて、遊歩道も整備されていて、いろいろな機会もできていて、法整備もされてきている。ある程度もう届いてきているということが確認できたかなと。その上でやっぱり創造性だとか、連携をしてやった方がいいということもありました。それから鈴木さんの宣言みたいなものを出したらいいんじゃないかという提案ですが、これちょっと失敗したなと思ったんですけど「ゲリラ上等（合法的に）」と書いていて（笑）ゲリラ的にやって既得権でやっていた方たちも面白いことやっていた時代があったねという話を聞いていた時に、今の時代、私

■パネルディスカッション 「水都・東京の川の価値再発見」

たちそういうのなかなか言い出しづらい時代ではあるんだけど、やっぱり人のやる気を直結して表現できるようなもの、ビジネスにしたり活動にしたりするっていうことが非常に大切になってきたから、う～ん、ちょっとゲリラ的でもいいかな？と思ってこんなキーワードを書いてみました。「合法的なゲリラ上等宣言」みたいな感じでいいですか？いやこれは冗談です（笑）でもやっぱり東京もある種、こういうことまで言えるような状況まで来たということで、ぜひですね、これから水辺の活動に関わられる方、それから楽しみながら川を学ぶ体験活動を供給される方たちのご協力も得て、東京をこれからもまた盛り上げていきましょう！というところでございます。最後に竹村先生のお言葉を頂戴いたしたいと思います。

竹村氏：

今日聞いていて、東京は羨ましいなと思いました。なぜかというと、土屋さん田村さんの安全、水害、インフラ。鈴木さんの文化。陣内さんが半世紀に亘って景観がなっていないということを言い続けて、我々痛い耳をずっと押さえていたんですけれども（笑）。ここまで最優秀の方々が集まって喋れるというのはやっぱり東京なんですよ。ですから RAC の方々はまた全国に散らばって帰るんですけど、帰っちゃうと孤立して連帯する相手がいないんですけど、ミズベリングという新しいシステムができたからそういう場をもって逆にローカルのこういう川のこういうメンバーを集める努力というか、河川事務所や市役所はやると思いますよ。趣旨さえ言えば、でこれほど素晴らしいレベルじゃなくても、ご年配の川の話の聞くとかですね、そういうことをやっていくことが大事だな、ということをやっと RAC の立場から、私も RAC を始めた時の河川局長だったので、非常にそれを感じています。ですからこの RAC の人々が帰って今度はその地域の中心人物になる。この壇上に立っている方々も全部の分野では中心人物になれませんのでね、でもどこかにいる筈ですよ。その歴史の、郷土史をずっとやっている人。または郷土史の絵を、スケッチを書いている人とかですね、必ずいます。それを河川事務所と一

緒になって探して、こういうシンポジウムをですね20、30人でいいからやっていく。というのを今回の会を聴いていてつくづく感じました。なおかつ今日国土交通省の河川系の方がいらっしゃるんですが、これはやることいっぱいありますね、これからね。これは羨ましいですね（笑）今までは治水一生懸命やれというのが精一杯だったんですけど、それ以上のことをやらなきゃいけないことがいっぱい出てきちゃった。ある程度の水準になったんだね、十分ではないですけど。一つアドバイスをしますけど、死んでる法律が一個あるんですよ。運河法です。これね、河川系の所管ですよ。これは完全に死んでる。これは利根運河をやることはやれるんです。運河法を勉強してみてください。ということでまだまだやることいっぱいありますので、陣内さんの言葉で、より良い社会のため、安全でより良い社会のためにはまだ、皆さん、RAC の方々も行政も、やることいっぱいあるなど。以上です。

岩本氏：

どうもありがとうございました。竹村さんの応援の言葉もすごく響きまして、どうもありがとうございました。大変ですね、国土交通省の皆さんも（笑）。これを私たちはこの東京での会をもってですね、改めて水辺が今いる立ち位置を確認できたのかなと思います。東京だけじゃなくてですね。それをもって一緒になってやっていくカウンターパートとしての国交省さんたちの役割についても私たちは水辺の活動を通して知ることでもできると思うので、ぜひ一緒に、連携をして進めていただければと思いますし、「水辺がおもしろい」ということをですね、ぜひ若い人たちに僕たちは伝えたかったんです。ちょっとでもいいから伝わたらいいなと思います。長い間ご清聴ありがとうございました。

司会：

ご登壇いただきました皆様、本当にありがとうございました。それでは「ゲリラ上等」ということで今後もぜひ川活動を広げていく努力を我々 RAC はしなければいけないと改めて思った次第でございます。ありがとうございます。

■ エクスカーション説明・次回全国大会への フラッグ受け渡し／抽選会など

司会：

では抽選会に移る前に会場を整理するのですが、その間にですね明日のエクスカーションの説明をさせていただきますと思います。お手元のプログラム 5 ページをご覧くださいませでしょうか。もうご参加するエクスカーションが決まっている方もいらっしゃると思いますが、1 つ目が神田川・日本橋川・江戸城コースでございます。こちらはプロのガイドと先ほどご登壇いただきました土屋さんの説明を聞きながらの、都心の水辺の船旅になっております。集合場所は日本橋船着場、滝の広場となっております。そして 2 つ目がですね、旧中川・北十間川コースでございます。E ボートを使いまして、荒川ロックゲートを通船予定です。集合場所は旧中川、平井船着場となっております。3 つ目、荒川ロックゲート体験コースにつきましてはですね、後ほど荒川下流河川事務所の出口様よりご説明いただきますのでよろしくお願いいたします。4 つ目なんですけれども、都心でラフティング体験につきましては、昨年の東京オリンピック・パラリンピックのカヌー競技の会場として整備された人工の激流河川、カヌー・スラロームセンターで行われます。集合場所は西葛西のカヌー・スラロームセンターです。エクスカーションにつきましては全て事前予約制でございますが、コースによっては若干空きがあるようでございますので、後ほど RAC の事務局の方にお問い合わせいただければと思います。

只今より荒川下流河川事務所長の出口桂輔様より荒川ロックゲート体験コースと荒川放水路 100 周年についてのご説明をいただきたいと思ひます。どうぞよろしくお願いいたします。

出口氏：

皆さんこんにちは。荒川下流河川事務所の事務所長をしています出口と申します。明日のエクスカーションで③の荒川ロックゲート体験コースということで、もう既に予約はいっぱいだというふうに報告は受けておりますが、通船体験をしていただいて、



京成本線の建て替え事業の現場ですとか、荒川放水路の歴史なんかを船の中から楽しんでいただくコースを用意しております。既にいっぱいだということでありありがとうございます。9 時の便はまだ空いているかもしれないということなので、もし空いてましたら追加で登録をいただければと思います。ロックゲート通船体験はすごく面白いんですけども、船のエレベーターということでパナマ運河と同じような水位差を体感していただけます。その体感だけでなく、この周辺すごく面白いものがいっぱいありまして、小松川の閘門跡ですとか塩の道と呼ばれた小名木川を歩きますと護岸を継ぎ足したところが残っていたりします。いろいろな歴史とか、先ほど先生からもありました 0 メートル地帯の高低の差っていうのが、大島小松川公園から街中を見ますとですね、本当に見下ろすような格好で分かります。乗られる方だけではなくてですね、ぜひ大島の駅からもすごく近いので、ロックゲートに足を運んでいただけたらと思います。で、私がここに来ましたのはですね、一つご紹介がありまして。荒川放水路がですね、再来年 2024 年で通水から 100 周年を迎えることになります。100 周年の記念事業というものを今準備を進めているところであります。ぜひ RAC の皆様ともですね、100 周年事業ということで水辺

■エクスカージョン説明・次回全国大会へのフラッグ受け渡し／抽選会など

の盛り上がりにも私たちが貢献できたかなと思います。本日はおめでとうございます。ありがとうございました。

司会：

出口様ありがとうございました。それでは抽選会の準備はいかがでしょうか？では魅力的な商品が前に並んでおりますが、大事な大事な引き継ぎをこちらで行いたいと思います。来年度の RAC 全国大会の開催地ですが、福井県の田中様が引き受けてくださいました。これより福井県の一般社団法人環境文化研究所の田中様に、本年度の実行委員長よりフラッグの受け渡しを行いたいと思います。田中様、ご登壇いただいてよろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。



田村氏：

第21回東京大会、東京からですね、来年度第22回福井大会に向けて、フラッグの、バトンの受け渡しをしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：

それではフラッグを受け取られた田中様に一言いただきたいのですが、よろしいでしょうか。お願いいたします。

田中氏：

田中でございます。福井県からやってまいりました。こんにちは。2001年から RAC の全国大会が始まりまして、実は福井県、2004年、平成16年に福井で大洪水、足羽川が氾濫しましてですね、福井

市内が水浸しになったっていう時に開催をしております。それ以来ですねかなり時間が経ちまして、今回の東京大会が2回目なんですよ？ということで2回目を引き継ぐのが東京以外に初めてなのもまた福井県ということで、来年2023年の10月くらいになるんじゃないかなって思ってますが、開催を予定しております。今回のテーマは九頭竜川、ドラゴンです。九頭竜川を予定しております。って言いながらですね、まだ1ミリも決まっていません。何も決まってませんが、実は川のあるまちづくりということで一つ話をするとですね、我々はいま九頭竜川で本気でメダリストを出すっていうまちづくりをしています。フリースタイルカヤックでございます。ま、あのそういうことでスポーツだけではなくて、先ほどの陣内先生の話でもあったナイトビジネスってところも注目したりとか、冒頭、相馬さんの話でしたかね、座禅の話もありましたけども、フィールドは禅寺がある永平寺というところを予定しております。ま、だけではなくてですね、福井県全体をフィールドにと思っていますので、タイトルは必ず「第22回川に学ぶ全国大会 in 越前若狭」でございます。ぜひ来年は皆さん福井にお越しいただけたらと思います。ということで福井でお待ちしております。ありがとうございました。



司会：

それではお待たせしました。お待ちかねの抽選会を開催したいと思います！皆さん、名札の準備は大丈夫ですか？名札の横に書いてある番号をじっと見

■エクスカーション説明・次回全国大会へのフラッグ受け渡し／抽選会など

つめながら、ただいまより株式会社クリアウォーターの清水様がくじを引いてくださいます！今回の商品の提供者でもございます。皆様、盛大な拍手をお願いいたします。一言お願いいたします。



清水氏：

東京大会が無事開催されて、スタッフの今までのご尽力、大変心より感謝いたします。お疲れ様です、どうもありがとうございます。今回、スタッフも当然くじ引きに入っております。番号を当てて、順番にいい商品を選んでもらいます。例えば40番の方が当たったらこの中から好きなものを選んでいきます。次に30番の方がもし当たった場合ですね、40番の方がどれにしようかな～って選んでいる最中に、これだなって30番の人が先に取っちゃったら30番の勝ちです（会場笑）。今回私どもが持ってきたのは防水バッグです。水辺で活動するために大変重要な。大きいバッグ、これライフジャケットから何から全部入ります。濡らすじゃなくて、濡れたものを中に入れると、車の中が濡れないんです。これ大きく開いてバッグの中で脱ぎ着をすると濡れたもの、着たものが砂がつかないのでそのまましまいきめる。洗濯機も砂だらけにならないと。こういうダッフル系のものもあれば、リュック系、背中に背負えるやつもあります。で今回ですね、一番売れている大人気商品なんですけど、ダッフルにもなるし、ベルトを変えたらリュックにもなるという。色も3色全色持つ

てきています。あと RAC 事務局の方から水辺の活動には絶対必需品な RAC ライフジャケット、これが15着。で、これがポンプですね。このポンプもです。これなぜかという、この中に風船が入っています。風船を膨らませるためにもちょっと使ったんですけど、これも景品になります。これはですね、ライフジャケットにつけましょうか？これだけ電車の中に持っていかれると不審者ですから（会場笑）。一応これは袋に入れさせていただきます。それではよろしいでしょうか？

ではいきまーす！最初の記念すべき番号、113番。次52番。…

司会：

これがラストですか？おめでとうございます。では続きまして鈴木様からのご提供品でございます。ご説明をお願いします。

鈴木氏：



中身はですね、クリアファイルや一筆箋とかですね、本とかいろいろです。巴水のものばかりです。

130番の方。…

司会：

…最後26番の方。おめでとうございます！

以上をもちまして抽選会が終わりとなります。

■ 閉会の挨拶

宮尾 博一（NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 代表理事）



皆さん今日は全国大会にこのようにたくさんお越しいただきましてありがとうございました。実はこの実行委員会が実際に動き出したのはこの5月で、先ほど次回開催地の田中さんがおっしゃっていたのと同様に、その時点では内容は何も決まっていなかった。当時コロナがどうなるかわからないという中で、どこを会場にするか、一体どんな内容にするか、東京で開催するんだからやはり実行委員会には国土交通省の本省抜きではだめだよねみたいな話になって、というようなことから議論を始めてやってまいりました。会場につきましてはコロナの時にキャンセルになっても最大限のリスクがないかもしれない、いや本当はあったかもしれないんですけど、ここ日大の安田先生にRACの理事に今年から入っていただいておりますので、ご協力いただきましてこの会場を確保できました。そして今日は基調講演に竹村さんにお話しいただき、そしてパネルディスカッションにも、とても私も久しぶりに会うような、普段なかなかお話を伺う機会のないような方々をお招きして、お話を聴くことができました。

RACにつきましては、いつもの全国大会はRACのメンバーが主体となっているところがあるんですけども、今回は久しぶりの東京開催ですので、今

日はRACのことをご存知ないであろう方々にもお越しいただきました。RACについては、話の中にも何回も出てきましたけれども、営利活動をしているわけではございませんで、ひたすらに川の指導者を全国に育成しよう、そしてその結果として川に親しむ子どもたちの笑顔を作っていこう、そして水難事故を減らそう、という活動をしております。まだRACのことをご存知ない方はぜひこの機会に、RACのことに関心を持っていただいて、我々のことをご支援いただき、どんどんRACの仲間に入っていただきたいなというふうに思っています。

5月から準備を始めて本当に何をやろう、これをやりたいと皆さんにお伝えしたいことがたくさんあったものですから、無茶苦茶盛りだくさんの内容になってしまいました。内容の結果については先ほどコメントーターの竹村さんがとっても上手くまとめていただきましたけれども、私たちとしては盛りだくさんのことを皆さんが語っていただいたことですから、その中から今日初めてRACのことを知ってくれた方々、そして地方で活動している中でいろんな資金源に悩まれているとかコロナで悩まれている方々に、一つでも参考になることがあれば、今日やった甲斐があったかなというふうに思います。

この全国大会については毎年、実行委員会が河川財団の河川基金の助成を受けて開催しております。今日は財団の方もたくさんきておられますけど、ありがとうございました。それから今年は関東地域づくり協会様からも助成金をいただいて運営しております。ということで、盛大な大会ができました。といいながらも、外部のイベント屋さんには全然委託をしているわけではなくて、全部直営でやっておりますので、はたして今日のZoomがきちっと流れたかどうかなど多少心配しているところはあるんですけども、なんとか今日の部は無事に終わったようで、皆さん景品をお持ちになっていただけた方には笑顔があるということで、ほっとしております。

どうもありがとうございました。



■エクスカージョン① 神田川・日本橋川・江戸城コース

プログラム：動力船で歴史クルーズ テーマ：歴史・文化・防災

■開催概要

開放感抜群のオープン型動力船で日本橋・神田川を廻る、90 分間の歴史・文化・防災の沢山詰まった日本橋川、神田川そして隅田川周遊のクルーズです。定員 44 名の屋根なしのオープン船に船会社のガイドが付きましたが、土屋信行さんも乗船し所々で補足ガイドをしてくださいました。

名橋の「日本橋」の下の船着場からスタートして上流へ、右回りコースです。見上げるとすでに首都高撤去の工事は始まっており、なんと道路がなくなっている個所もあります。東日本大震災で被災した後の復旧工事が完了してほごない「常盤橋」など常盤橋 3 橋をくぐり、一石橋、鎌倉橋…、歴史のある橋の連続です。明治、大正期に建設された鉄道橋を下から眺め、150 年前の橋梁が今もそのまま日本の成長と繁栄を支えているという当時の技術力にも感動しました。

神田川へ出ると、後樂園ドームを左に見たあとは、水道橋付近で、不燃ごみトラック 15 ～ 20 台分を積み替えて臨海部の処理場へ運ぶという運搬船を横に見ながら通り過ぎます。そして、お茶の水溪谷、掘削の歴史や治水のためのバイパストンネルを間近に見て、「聖橋」。地下鉄丸ノ内線の下を船でくぐるという貴重な経験もしました。

「万世橋」「柳橋」などさらに数々の橋をくぐって隅田川へ。日本橋川、神田川を通ってくと隅田川が大河に感じます。隅田川に左から入ってくる堅川や小名木川の成り立ちの説明をきいて家康の行ったインフラ整備の偉大さにあらためて感心します。

締めクライマックスは、再び戻ってきた日本橋川のけた下です。現在の日本橋は明治 44 年（1911 年）に竣工した石造 2 径間連続アーチ橋です。関東大震災の際に燃えて流れ着いた船の災で焼けただれた桁石が今も生々しく残っています。震災でも壊れず、炎にも耐えて 110 年頑張ってきている姿に感動しました。この日本橋の上空にある高速道路も

2040 年にはなくなり、建設当時の日本橋の開けた空が見えるようになります。移り変わる姿を引き続き見てゆきたいものです。

川の成り立ち、江戸城のお堀との関係、江戸時代からの歴史や最新の情報、橋梁技術、治水技術、鉄道も含めて興味のあることてんこ盛りの 90 分でした。

■行程（時間割）

開催日：令和4年10月30日（日）

10：00 日本橋船着場 滝の広場
参加者集合 受付

10：20 乗船開始

10：30 日本橋船着場スタート

- ①常盤橋、日銀、東京駅周辺開発
- ②江戸城石垣の各藩普請の刻印など
- ③神田川溪谷、治水トンネル、開発の歴史など
- ④隅田川、新大橋、小名木川、清洲橋など
- ⑤日本橋川へ、最後に関東大震災の火災で焼けただれた日本橋の下を見て終了

12：10 日本橋船着場

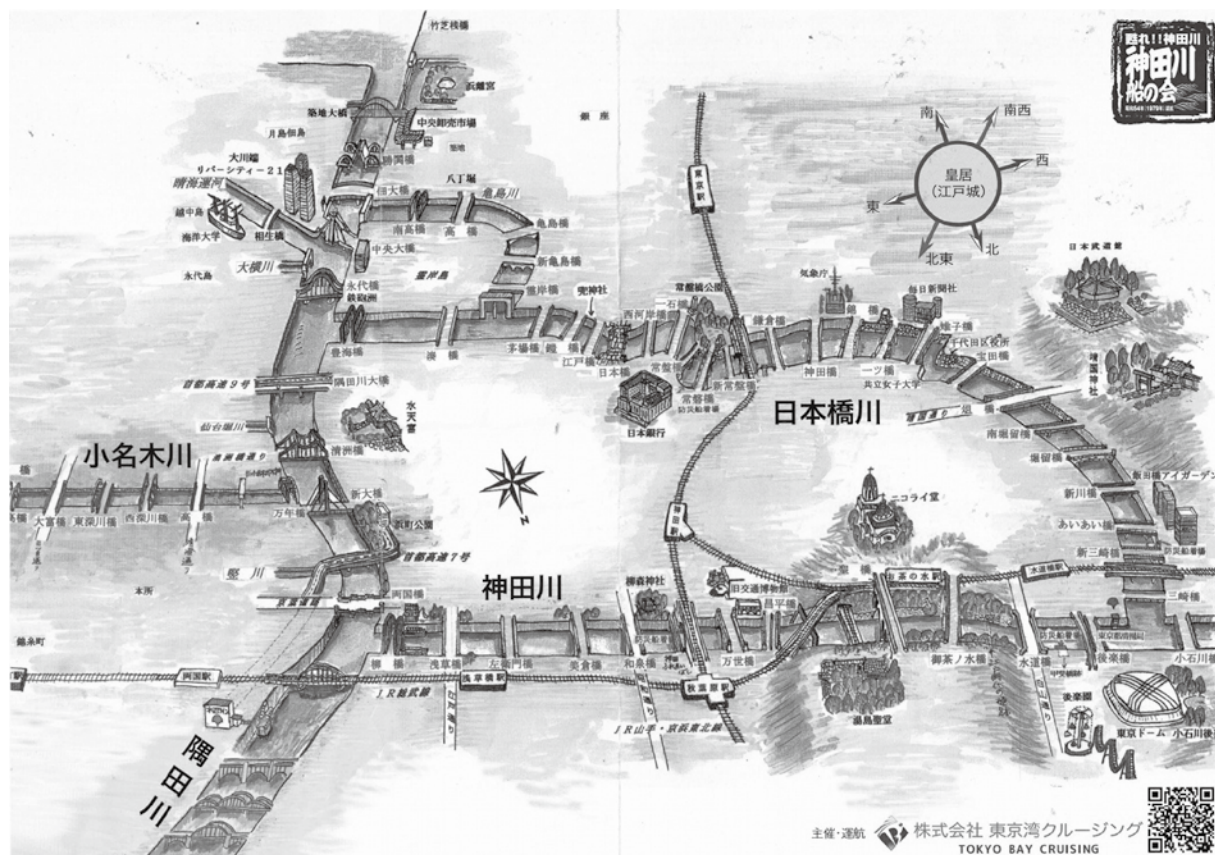
■参加者数

一般参加者 32人

事務局 3人



■周遊コース地図



■感想

- 10時集合としたが、みなさん遅れることなく集合してくださった。
- 日常的にガイドツアーをしている会社に依頼して実施したツアーだったので、ガイドが説明内容に合わせて自らガイド操船し、また、簡潔で分かりやすい説明でよかった。
- 90分のコースは時間的にも適当であり、内容的にも豊富で勉強になったと思う。
- 参加者の皆さんも満足な笑顔だったし、エクスカージョンとしては大成功といえよう。
- 個別にも乗船されることをお勧めしたい。

■エクスカージョン② 旧中川・北十間川コース

プログラム：E ボートを活用した水辺体験 テーマ：SDGs・観光・防災

■開催概要

SDGs、観光、防災をテーマに、江戸川区、墨田区、江東区の境界を流れる旧中川をEボートで周遊した。

素晴らしい秋晴れの中、参加者の皆さんも十分満足されたエクスカージョンとなった。

旧中川は海拔ゼロメートル地帯を流れる全長6.68kmの川であるが、平井船着場から小松川船着場までの約4kmを、かさ上げ護岸や渡しの跡を確認したり、東京スカイツリーを遠望しながら下った。学生にガイド役を務めてもらい、漕ぎながら江戸時代からの旧中川の歴史を学ぶ機会とした。旧中川では、護岸整備や植栽等で自然環境も大きく改善され、多くの釣り人やボート愛好家が旧中川を楽しんでいた。生態系の豊かさも回復しているらしく、魚類や鳥類に姿も数多く確認できた。

小松川船着場では下船してトイレ休憩時間を設けた。再度乗船し、荒川河川事務所の「あらかわ号」と一緒に入った荒川ロックゲートの中では約2メートルの水位上昇を体感し、旧中川と荒川放水路との水位差とともに東京ゼロメートル地帯を実感していただけたと思われる。

荒川は海風が吹き始めていたため、あまり時間を取らずに荒川ロックゲートを通過して旧中川へ戻り、小松川船着場で下船した。

■行程（時間割）

開催日：令和4年10月30日（日）

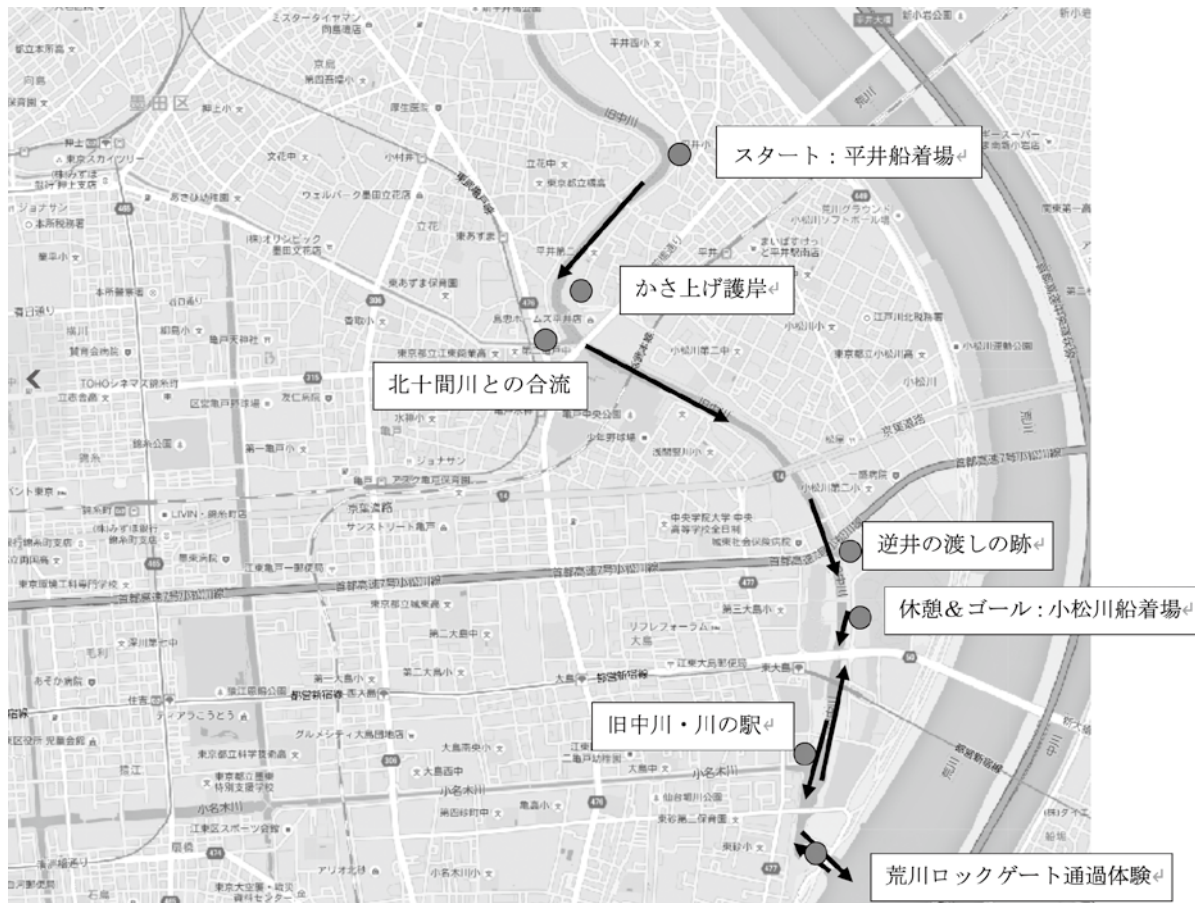
- 9：00 平井船着場 参加者集合 受付
- 9：10 趣旨説明、安全指導、乗船準備
3艇にグループ分け、グループごとに漕ぎ方の指導、安全に関する講習
- 9：30 平井船着場スタート
※チェックポイント
①かさ上げ護岸
②北十間川との合流地点
③逆井橋と逆井の渡しの跡
④旧中川の生きものたち
- 10：30 もみじ橋・小松川船着場到着
休憩（トイレは大島小松川防災公園）
- 10：50 小松川船着場スタート
※チェックポイント
⑤旧中川・川の駅と小名木川
⑥荒川ロックゲート
⑦荒川放水路
- 12：10 もみじ橋・小松川船着場到着
Eボート片付け・撤収
- 12：30 閉会式
- 12：40 解散

■参加者数

一般参加者 22人
乗船スタッフ 8人 乗船者計 30人
陸上スタッフ 2人



■周遊コース地図



■感想

- 初めてボートでロックゲートの通過体験が出来て楽しかったという感想があった。この日の水位差は、2.1mであった。
- 天気が良かったこともあり、川沿いは多くの釣り人で賑わい、水面ではボート協会やドラゴンボートが練習していたり、カヌーを楽しんでいる方も多数いて、地方のRAC関係者からも、地元でこれほど人々が遊んでいる川はないという感想であった。
- 田村実行委員長の閉会の挨拶で、地元の人から春の時期の桜が素晴らしいという話も聞いたので、年に4回くらい乗船をしようという提案があった。

■反省点

- Eボート3艇のうち2艇が漏水しており、下船時に靴を濡らす人を出さることになってしまった。
- アンケートなどで、参加者全員の感想が聞ければよかった。今からでもメールでお礼とともに依頼することは可能。
- RACのフラッグを用意していなかった。
- 時間配分を考慮して北十間川をカットしたが、結果として北十間川に500mくらい行って、スカイツリーを見て来る時間は取れたと思われる。

■エクスカージョン③ 荒川ロックゲート体験コース

プログラム：あらかわ号でロックゲートを通過し荒川下流部を周遊

テーマ：防災・歴史・観光

■開催概要

荒川は明治43年の大洪水による洪水被害を契機とする抜本的な治水対策として、明治44年に開削工事が着手され、昭和5年に延長約22キロの「荒川放水路」が完成、昭和40年には現在の河川法が施行され、「荒川放水路」が正式に「荒川」となりました。

「荒川放水路」は大正13年に通水を開始し、2年後の令和6年10月に通水100周年を迎えます。ロックゲート（閘門）とは、水位の異なる二つの河川を行き来する為の施設で「エレベーター」のような役目を果たします。荒川と旧中川の水位差は最大で3m以上になりますが、荒川ロックゲートが完成したことにより、荒川と隅田川に挟まれた“江東デルタ地帯”への水上交通が双方向から確保できるようになりました。これより災害時における救援物資や復旧資材などの運搬、被災者の救出など災害復旧活動の支援が可能となりました。沿川都市の持続可能な発展を支え、都心部の貴重なオープンスペースとして地域に寄り添って来た荒川と荒川ロックゲートを体験しました。

■行程（時間割）

開催日：令和4年10月30日（日）

9：00 9時出発の参加者は番所橋船着場集合 受付

9：15 番所橋船着場 出発

※チェックポイント

①荒川ロックゲート通船

ロックゲートの説明

②荒川放水路の歴史など説明

③鉄橋のかさ上げ地点での説明

10：00 鉄橋及び堤防のかさ上げを確認して引き返す

④再度、荒川ロックゲートを通船

10：50 番所橋船着場に到着 下船

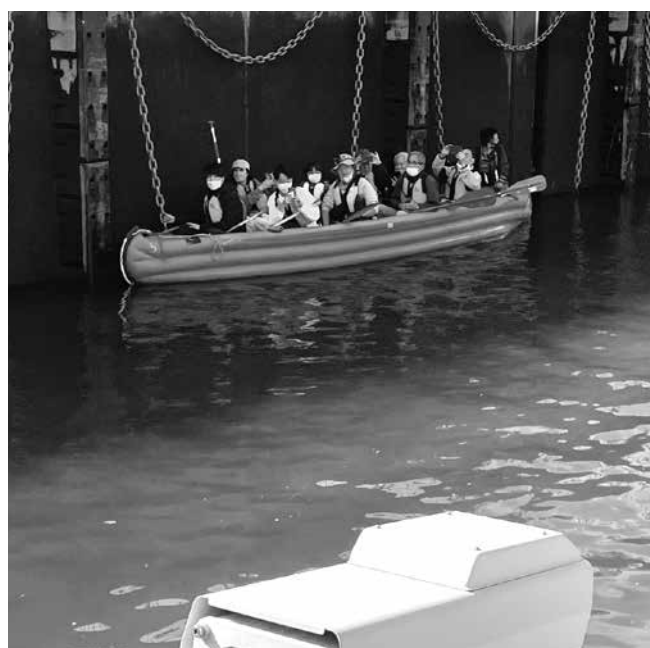
11：00 11時出発の参加者の集合受付など

■参加者数

一般参加者 19名

乗船スタッフ 6名

陸上スタッフ 3名



■周遊コース地図



■感想

- 乗船者から荒川ロックゲートをはじめて通船して旧中川と荒川の水位の差がこんなにあることを知らなかったという感想があり、なかなか、出来る経験ではないという意見もあった。
- 旧中川から荒川ロックゲートを通船して荒川に出たとたんに視界が開けて荒川がとても広いと感じたという感想があった。参加者の子どもがまるで海みたいだとはしゃいでいた。
- 大規模災害が発生した場合、首都圏の道路網が大打撃を受け、交通マヒが発生したときに本日乗船している災害対策支援船「あらかわ号」が活躍することを知りました。河川沿いに緊急船着場の整備が行われていることもお話ししていただきました。災害時にはこの船が司令塔になると言うお話しをお聞きしてびっくりしました。という感想もありました。

■反省点

- 集合場所(乗船場所)分かりづらかった。目印など旗などを立てればよかった。
- 集合時間などをはっきりと伝えていなかったので出発時間ではなく集合時間を連絡した方がよかった。しかしながら誰も遅刻をする人がいなかった。

■エクスカーショ④ 都心でラフティング

プログラム：オリンピックレガシーのカヌー・スラロームセンターでラフティング
テーマ：自然体験への誘い、体験教育

■開催概要 参加者 20 名（見学 3 名）

当エクスカーショの会場「カヌー・スラロームセンター」は葛西臨海公園内に位置する。東京オリンピックのカヌー・スラローム競技場の利活用拠点として、今年の7月23日より一般利用が始まった。

今回はそのセンターで営業する「ラフティング」体験を貸切りして、合計4艇のボートに分かれて体験した。

競技コースまでは静水エリアを漕いで行き、ベルトコンベアのスロープを登り、スタート地点まで移動。生憎、コンベアは改修の為、稼働していなかったが、一般利用者は降りないところを徒歩で登るという、それはそれで貴重な体験となった。

各ボートのチームは、参加者グループのまとまりをもとに別れ、各ボートのガイドがそれぞれ参加者に合わせた楽しみを構成頂いた。



RAC トレーナー・ボートは、かなり攻めたコース取り。そのため北海道のトレーナーが敢え無く落水、直ぐにバックアップがスローバックで救助されるという、貴重な場面もあった。

最後の振り返りで、当該公共施設のさらなる有効活用について等を共有した。

■参加者コメント

- 水温がもう少し高かったらよかった。
- ボート上の目線から、せめて隣接する駐車場のトラックなどが見えないような目隠しがあるといいのではないか。
- 河川管理者や河川の研究者が、単純な水の流れを体感できる貴重な場所。一度は体感してほしい。川底の形状も明らかなのでエントラップ体験なども安全にできそう。
- 修学旅行や教育旅行の受け入れ先として活用できる。
- ガイド力がとても高かった。
- 足立区でカヌーやEボートを使ってごみ拾いや安全講習などをやっている。できるだけ活用したいので、施設利用料をなるべく安くして沢山の人が来られるようにしてほしい。
- この景観は、都会ならではの景観なのでこのままでいい。
- 瀬に入る前に、中に座るように指示されたが、漕ぎたかった。
- 普段は大自然の中でボートに乗っているので、逆に新鮮で楽しかった。長野で体験した人にもお勧めしたい。
- ラフティングガイドのトレーニングとして活用できそう。
- ラフティングを知らない人も多い。東京エリアの人がここで体験して、自然の中のラフティングにも来てもらえるといい。
- 学生のラフティング競技のクラブは吉野川ぐらいしかないなので、ここでもクラブができるといい。
- 東京ディズニーランドとセットで修学旅行先として売り込める。
- 夜にライトアップして、ナイトラフティングができる。それが可能なのは日本中ではここしかないと思う。

各地域で活動する川の指導者の意見として、施設の管理元となる東京都等にも伝えていきたい。

■協賛団体

魚の生態に学ぶ生きた川づくり

多くのフィールドと水理実験から得られたデータが
豊かな河川を取り戻します

棲流(せいりゅう)

(株)大隆設計と共同開発

石材、間伐材を用い
多様な組み合わせが
可能な護床ブロック



ステップール

全越流・アイスハーバー
混合型魚道ブロック



瑞流(すいりゅう)

(公財)リバーフロント研究所
と共同開発

護床ブロックにアイス
ハーバー型魚道機能
を付加した構造



遊泳(ゆうえい)

開水路とアイスハーバ
ー型や全越流型の隔壁
を組み合わせた構造



祝 全国大会開催 NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会 会員



共和コンクリート工業株式会社

本 社	〒060-0808	札幌市北区北 8 条西 3 丁目 2 8（札幌エルプラザ） TEL 011-736-0181
東京本社	〒170-0005	東京都豊島区南大塚 3-10-10（いちご南大塚ビル） TEL 03-6907-3721
関東営業部	〒170-0005	東京都豊島区南大塚 3-10-10（いちご南大塚ビル） TEL 03-6907-3728



すべての人にネイチャーカヌーの楽しさを



九州スクールニュース株式会社

〒803-0261 福岡県北九州市小倉南区合馬1578番地
Tel 093-451-5501 Fax 093-482-3390
URL : <http://www.canoe.co.jp>



写真:西沢あつし

クリアウォーターカヤックス



カヌーの事なら
おまかせ下さい!!

至千葉
至千葉みなと
JR内・外房線
JR蘇我駅
JR外房線
至茂原
至五井

〒260-0835
千葉県千葉市中央区川崎町1-34 GLOBO



株式会社クリアウォーター

営業時間 **10:00~20:00** 年中無休

TEL 043-497-3951

FAX 043-497-3952

白馬ライオンアドベンチャー

株式会社ストップオン

■ 実行委員

第21回 川に学ぶ体験活動全国大会in東京

【実行委員】

順不同・敬称略

職 名	氏 名	所 属
実行委員長	田村 祐司	東京海洋大学 准教授／一般社団法人水難学会 副会長
副実行委員長	宮尾 博一	NPO法人川に学ぶ体験活動協議会 代表理事
実行委員	信田 智	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課 河川環境保全企画調整官
実行委員	塩井 直彦	国土交通省関東地方整備局 河川部長
実行委員	出口 桂輔	荒川下流河川事務所 所長
実行委員	板倉 浩幸	相模原市立相原小学校 教諭
実行委員	岩本 唯史	株式会社水辺総研 代表
実行委員	斉藤 隆	NPO 法人つくばハーモニー 理事長
実行委員	佐藤 繁一	NPO 法人国際自然大学校 事務局長
実行委員	清水 昭夫	株式会社クリアウォーター 代表取締役
実行委員	鈴木 昇	株式会社ニフティー 代表取締役／国際新版画協会 会長
実行委員	辻 英之	青森大学 非常勤講師
実行委員	土屋 信行	公益財団法人リバーフロント研究所 技術審議役
実行委員	松本 猛	水都東京・未来会議 委員・事務局
実行委員	村松 真哉	公益財団法人ハーモニセンター 理事長
実行委員	森 美文	森環境教育事務所 代表
実行委員	安田 陽一	日本大学理工学部土木工学科 教授
監事	吉野 英夫	NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 監事
事務局	橋本 正法	NPO 法人地域交流センター 代表
事務局	橘 昌憲	NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会
事務局	大井 里美	NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 事務局長

■ RAC について

RAC の紹介

川に学ぶ体験活動協議会 (River Activities Council 略称: RAC) は、川での体験活動を支援・推進するあらゆる活動を、時代に合わせて総合的に展開していくために、川をフィールドにして活動している各地のNPO法人・市民団体が参加し、2000年9月に設立され、2005年12月にNPO法人として登録した協議会です。

設立の背景

1997年には河川法が改正され、1998年6月、河川審議会「川に学ぶ小委員会」がまとめた「『川に学ぶ』社会をめざして」という答申が出されました。

この答申では、「古来より、人は川の流れと共に暮らし、川を愛し、川から多くのことを学んできた。それは川が豊かな恵みをもたらし、交通・交易の場として人々の生活を支えてきただけでなく、人間の心性に関する文化を育んできたことの現れである。川とのつながりを取り戻し、川に学ぶ社会を創造すること。それはすなわち近代が生み出した地球規模の環境問題や私たちの心の危機を乗り越え、真に幸福な次期文明を探ることにつながる。なぜなら、川とは自然の生態系であると同時に、流域という共同体や生命のつながりそのもの。川に学ぶ社会を創造するため、まずは、川の魅力とその本当の姿、川の作法を守ってきた先人の知恵を広く多くの人に伝えることが大切」と提言されています。

活動の目的

RACはNPO法人の定款において下記の通り活動目的を定義しています。

地域の振興には健全な流域の発展が不可欠であるという認識に立ち、これを構成する流域の歴史・風土・自然・生活・文化等をとおして、地球環境の根幹ともいえる水循環を担う「川」を理解する「川に学ぶ」という理念のもと、川及び水辺での継続的な体験活動とそれを支える「川の指導者」を育成する他、この活動の普遍化に向けて産学官民の連携のもと様々な分野や地域を越えた交流や支援を行い、同時に円滑な活動を推進するために必要な調査研究や普及啓発を図り、もって良好な河川・水環境の保全及び創出に寄与することを目的とする。

上記定款の目的に賛同する全国各地の市民団体や各種組織や有志により、先に制定された川に学ぶ理念を柱として指導者養成や各種普及活動等を全国各地で展開しています。

第20回日本水大賞

RACはこれまでに、「川に学ぶ社会」を目指し、川の指導者プログラムをゼロから作り上げて、水循環の保全と人間性豊かな人を育てる活動を20年近く展開してきました。その取り組みが評価されて、2018年に日本水大賞委員会（名誉総裁：秋篠宮殿下）により、応募総数143件の中から「大賞」に選ばれ、表彰されました。

■全国大会について

全国大会（川に学ぶ全国交流会・川に学ぶ体験活動全国大会）の開催

川に学ぶ社会を全国各地域に広めることを目的とする当交流会は、平成10年度から平成12年度までは国主導で実施されてきましたが、平成13年度からはRACの構成団体を事務局に、民間主導で開催されるようになりました。

開催地の会員団体が主体となり、開催地及び開催地の関係機関のご協力をいただきながら開催させていただいております。

【開催年 開催地 主な流域】

平成13年	第1回大会	岡山県岡山市	旭川
平成14年	第2回大会	福岡県北九州市	紫川
平成15年	第3回大会	徳島県徳島市	吉野川
平成16年	第4回大会	福井県武生市	日野川
平成17年	第5回大会	福島県会津若松市	阿賀川
平成18年	第6回大会	東京会場	-----
平成19年	第7回大会	岐阜県岐阜市	長良川
平成20年	第8回大会	熊本県熊本市	緑川、白川、球磨川、菊池川
平成21年	第9回大会	広島県広島市	太田川
平成22年	第10回大会	鹿児島県薩摩川内市	川内川
平成23年	第11回大会	神奈川県横浜市	鶴見川流域
平成24年	第12回大会	岩手県盛岡市	北上川流域
平成25年	第13回大会	新潟県見附市	信濃川流域
平成26年	第14回大会	宮城県延岡市	五ヶ瀬川
平成27年	第15回大会	北海道二セコ町	尻別川
平成28年	第16回大会	大阪府寝屋川市	淀川・琵琶湖流域圏
平成29年	第17回大会	福岡県北九州市	紫川
平成30年	第18回大会	茨城県取手市	小貝川利根川水系
令和元年	第19回大会	北海道滝川市	石狩川
令和3年	第20回大会	青森県三沢市	小川原湖

『川に学ぶ社会』を目指して（河川審議会小委員会答申 平成10年6月）

「川に学ぶ」社会の実現のためには、次の4つの基本方針が重要と提言されています。

- 1) 人々の関心を高める魅力ある川
- 2) 正しく広範な知識・情報の提供
- 3) 川に学ぶ機会の提供
- 4) 主体的、継続的な活動のために（自己責任のもと、連携や支援、活動拠点、保険等が必要）

第21回川に学ぶ体験活動全国大会in東京 報告書

発行

第21回川に学ぶ体験活動全国大会in東京実行委員会

〒114-0014 東京都北区田端1-11-1勘五郎ビル104

TEL:03-5832-9841 FAX:03-6893-2642 Mail:rac@rac.gr.jp